

社会、言語、思想

——スコットランド啓蒙の諸相——*

古家 弘幸

1. はじめに——スコットランド啓蒙とは？

「スコットランド啓蒙」(The Scottish Enlightenment)とは、18世紀スコットランドで開花した思想の隆盛を指して使われる歴史上の用語である。特に、社会についての新しい理解を提示した点が、その思想的な特徴であったと見なされている。もう一つの特徴は、その潮流に貢献した思想家の多くが、お互いに近い友人同士、親戚、大学や教会の同僚などで占められ、セレクト・ソサイエティ (The Select Society of Edinburgh) などの限定されたグループの少数のメンバーから、全ヨーロッパ的な影響力を持つ啓蒙思想が生まれ出された点である。当代を代表する肖像画家であったアラン・ラムジー (Allan Ramsay, 1713-1784) によって創設されたセレクト・ソサイエティは、今となっては画期的と言うしかない傑出したメンバー陣を誇っていた。18世紀最大の哲学者デイヴィッド・ヒューム (David Hume, 1711-1776)、スコットランド教会「穏健派」(Moderates) の領袖でエディンバラ大学学長を務めた歴史学者ウィリアム・ロバートソン (William Robertson, 1721-1793)、経済学の創始者アダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790)、社会学の創始者アダム・ファーガソン (Adam Ferguson, 1723-1816)、著名医師ウィリアム・カレン (William Cullen, 1710-1790) などである (Allan, 2002, p. 128)。

* 本稿は2013・2014年度科学研究費補助金(若手研究B)の研究成果の一部であり、国際基督教大学キリスト教と文化研究所特別公開講演会(2013年12月)での講演「社会、言語、思想——スコットランド啓蒙の諸相」を基としている。

個別の思想家についての研究は18世紀以来継続されてきたが、それらを総体的に扱う啓蒙思想としての研究は20世紀に入って本格化した。啓蒙思想の研究は、無知からの人間の解放という思想運動の普遍性・必然性を捉えるところから始まった。それは歴史を貫徹する法則を追究した自然法思想として当初は理解され、ホッブズ、ロックから始まり、モンテスキュー、デイドロ、ルソー、スミス、カントも「自然と社会」に関して考察した自然法思想家として捉えるエルンスト・カッシーラー (Ernst Cassirer, 1874–1945) の解釈が長く通説であった (Cassirer, 1932; 田中, 2013a, p. 182; 田中, 2013b, p. 106)。カッシーラーの啓蒙理解を発展させたピーター・ゲイ (Peter Gay, b. 1923) は、啓蒙思想にアンシャン・レジームとの対決という戦略を読みとりながら、啓蒙のプログラムを宗教への敵対、理性の批判的能力による自由と進歩の追求として理解した。ゲイは啓蒙を自由主義的改革への志向と捉え、従ってルソーを重視せず、反対にスコットランド、ドイツ、イタリア、ジェファークソンやフランクリンなどアメリカの思想家に注目し、啓蒙思想家の範疇を広げた。ゲイは啓蒙思想の背後にある社会的文脈にはあまり関心を払わなかったが、啓蒙思想の多様性には注目した (Gay, 1966; Gay, 1969; 田中, 2013b, p. 106)。

ゲイの研究以降、啓蒙の普遍的統一像を求める傾向より、多様性と差異を重視する傾向が次第に強くなっていく。啓蒙の地理的領域が拡大して理解され、社会的基礎や思想の普及過程などに関心が広がっていった (田中, 2013b, p. 107)。こうして1960年代には「スコットランド啓蒙」についての研究が、それ自体で個別の主題として認識され始めた。しかし当初は困難もあったようである。ケンブリッジ大学で歴史学講師だったダンカン・フォーブズ (Duncan Forbes, 1922–1994) がスコットランド啓蒙についての科目を開講したとき、科目名は「ヒューム、スミスとスコットランド啓蒙」(Hume, Smith and the Scottish Enlightenment) であったが、ヒュームとスミスを冒頭に付け加えたのは、スコットランド啓蒙を独立の主題として認めることに二の足を踏んでいた1960年代当時の学部教授会

を通すための工夫であった。この科目は、大学院生時代のニコラス・フィリップソン (Nicholas Phillipson, b. 1937) やクウェンティン・スキナー (Quentin Skinner, b. 1940) などを惹き付け、スコットランド啓蒙思想研究だけでなく、1960年代以降の英国における思想史研究の隆盛のきっかけの一つとなり、フォーブズ自身の『ヒュームの哲学的政治学』(Hume's *Philosophical Politics*, 1975) に結実した。フォーブズの考えたスコットランド啓蒙とは、ヒュームとスミスを中心に、他の多くの思想家も加わって実現した社会についての新しい考察の創生であり、英国にとどまることなく、大陸ヨーロッパにも視野を広げたコスモポリタンな性格を持った思想運動であった (Forbes, 1975, p. xi)。

同じケンブリッジ大学で1969年にトレヴェリアン講義 (Trevelyan Lectures) を行ったイタリア人歴史学者のフランコ・ヴェントゥーリ (Franco Venturi, 1914-1994) は、18世紀スコットランドにこそヨーロッパ啓蒙の本質が最も顕著に現れていると考えた。後進性と近代性が背中合わせであり、そこから様々な社会的矛盾が生まれ、愛国心の強い一群の社会運動家・思想家たちが経済問題を中心に新しい時代の課題に取り組んでいくという18世紀ヨーロッパ啓蒙のパターンが圧縮されて見られるのが、当時のスコットランドなのである。ヴェントゥーリの考えるスコットランド啓蒙とは、フォーブズを理解するスコットランド啓蒙よりさらに全ヨーロッパ的に共時的な思想運動であり、スコットランド啓蒙思想家たちは当時の出版市場の拡大にも後押しされて、国境を越えた思想的交流を通じてヨーロッパ各地で共通の課題であった社会の近代化を分析し、それを自国内で実践的にも後押しすることに互いに協働したのであった (Venturi, 1971, pp. 132-133)。

フォーブズとヴェントゥーリ以降、スコットランド啓蒙思想研究は一つの独立した分野として認知され、研究が蓄積されてきた。しかしそのプロセスで、彼ら先駆者によるスコットランド啓蒙理解は批判にさらされることともなった。例えばフォーブズやヴェントゥーリが啓蒙独自の貢献とみ

なした社会の分析は、自己利益と公共の利益との相反や、商業の拡大がもたらした社会的変化への関心など、17世紀以来のヨーロッパ思想の延長でしかないとの批判が現れた (Jardine, 1993; Goldgar, 1995 など)。また18世紀の啓蒙が17世紀の遺産の上に成立したものと見なす理解は、各国における思想的伝統や文脈の重要性に目を向けさせることによって、啓蒙を全ヨーロッパで共通の均一的な思想運動と見なす見解に修正を迫ることともなった。ヨーロッパ内部であっても、各国のローカルな状況の違いに応じて啓蒙にも多様性があったのだと見なす立場である (Porter and Teich, 1981)。この立場から、啓蒙思想におけるスコットランドの独自性に着目しつつ、スコットランド啓蒙研究を主導したのが、初期のニコラス・フィリップソンである。スコットランド啓蒙では、社会の発展とともに人間の能力もまた歴史的に発展していき、人間らしい感情も次第に育まれていくという認識が登場した。とりわけヒュームが詳論し、スミスが入念に仕上げた「シンパシー」と「洗練」の概念は、徳の概念を共和主義的・シヴィック的な卓越からアディソン流の上品なマナーへと大きく転換させたことフィリップソンは論じた (田中, 2013b, p. 161)¹⁾。スコットランド啓蒙の盛期は1745年のジャコバイトの敗北以降に到来するが、1707年のユニオンがスコットランド啓蒙に対して持った意味をジャコバイト運動との比較の視点から考察することは、多くの研究が遂行してきた (田中, 2013b, pp. 114–115)。実際にヨーロッパ啓蒙の中でもスコットランドほど、ローカルな特徴を色濃く反映していた場所はなかったと思われるし、1970年代以降のスコットランド啓蒙研究は、フランス啓蒙だけでは必ずしも完結されることのないヨーロッパ啓蒙の多様性を示す顕著なケーススタディとして推進されてきたと言える。

したがってスコットランド啓蒙研究では、啓蒙のスコットランド的文脈への関心から、これまで重視されてこなかった17世紀以前のスコットラ

1) 末尾の参考文献にあるフィリップソンの諸論考を参照。

ンド思想史と18世紀啓蒙思想との継続性が強調されるとともに、ドゥンス・スコトゥス（John Duns Scotus, c. 1266–1308）など中世後期のスコラ哲学や、ジョージ・ブキャナン（George Buchanan, 1506–1582）など近世初期の人文主義に対するスコットランド人の貢献にも光が当てられるようになった（Harris, 1927; Broadie, 2009; Erskine and Mason, 2012など）。また18世紀啓蒙思想を、スコットランド内におけるニュートン哲学や自然科学の発展まで含めた幅広い領域に及ぶ思想運動とする理解も有力となった（Campbell and Skinner, 1982; Dwyer, Mason and Murdoch, 1982; Daiches, Jones and Jones, 1986; Smout, 1986; Jones, 1988など）。

これまでのスコットランド啓蒙研究を主導してきたスコットランドの独自性を強調する立場が、18世紀のスコットランド思想を解明する上で有効であったことは明らかであるが、このアプローチの難点はスコットランド啓蒙を同時代のより広いヨーロッパ啓蒙から分離して解釈してしまう傾向であろう。しかしそれを防ごうとしたジョン・ポーコック（John Pocock, b. 1924）のように、スコットランド啓蒙を18世紀後半のラディカルな「イングランド啓蒙」（The English Enlightenment）との影響関係において研究する方向に進み、スコットランドとイングランドの好対照を強調したヴェントゥーリから離れて、またおそらくはポーコック自身の意図にも反する形で結果的にスコットランドの独自性を否定してしまうに至ったことは皮肉であった。そこから、スコットランド啓蒙をイングランド啓蒙と合わせて「ブリテン啓蒙」（The British Enlightenment）を構成する一部と見なし、理性重視で進歩的な大陸ヨーロッパの啓蒙（The Continental European Enlightenment）とは一線を画する保守的で懐疑主義的な思想運動として理解する近年の研究動向が生まれることとなった。ポーコックはホイッグ保守派の政治経済論者ジョサイア・タッカー（Josiah Tucker, 1713–1791）や、スコットランド、アメリカ、アイルランドの長老派などの聖職者啓蒙（The Clerical Enlightenment）だけでなく、歴史家エドワード・ギボン（Edward Gibbon, 1737–1794）やエドマンド・バーク

(Edmund Burke, 1729–1797) なども含めて保守的啓蒙 (The Conservative Enlightenment) と把握している (Pocock, 1985; Pocock, 1993a; Pocock, 1993b; 田中, 2013b, pp. 76, 185)。

ポーコックはしたがって定冠詞付きの大文字の「啓蒙」(‘The’ Enlightenment) など存在しないと論じ、様々な啓蒙の存在を認める相対主義的な解釈を取るが (Pocock, 1999, p. 13)、このような啓蒙における各国の独自性を強調することで、全ヨーロッパ的に共通する啓蒙の特徴を見失ってきたと批判するのがジョン・ロバートソン (John Robertson, b. 1951) である。特にスコットランド啓蒙研究の場合、スコットランド独自の文脈に捕らわれ過ぎると、スコットランド啓蒙がもたらしたヨーロッパ啓蒙全体に対する大きな貢献を見逃すことになる。ロバートソンは主張し、経済学を生み出したスコットランド啓蒙とナポリ啓蒙こそ啓蒙の典型として、啓蒙の普遍性を強調する (Robertson, 2000; Robertson, 2005; 田中, 2013b, pp. 12–13)。実際に近年の欧米のスコットランド啓蒙研究は、テーマの多様性と広がりが見られると同時に、ますますフランス啓蒙の研究と区別し難しくなっている。問題関心と分析手法に差異よりも共通性が強く見られるようになってきているのである (田中, 2013b, p. 105)。

本稿では以上のような研究史の整理を踏まえ、スコットランド啓蒙はヨーロッパ啓蒙と共通する課題へ大きな思想的貢献を成すと同時に、スコットランド独自の文脈からも影響を受けていたことを念頭に、スコットランド啓蒙の道德哲学と経済学を取り上げる。そして個別の思想家同士の間に見られる相違にも関わらず、スコットランド啓蒙思想全体に共通する特徴の一つは、人間の持つ自然な社交性についてのストア的分析であったことを明らかにしたい。その母体となった道德哲学はフランスとイングランドからの継承であり、それを啓蒙思想として大成したのがスコットランド人の道德哲学者たちであった。

ジョン・ロバートソンや田中秀夫が述べるように、啓蒙思想のスコットランドの国内的文脈の分析だけでは不十分で、ヨーロッパ大陸の思想との

接触にも注目する必要がある。スコットランド啓蒙思想家たちが、旅行や長期滞在、通信、動向紹介や書籍の講読などを通して、ヨーロッパ大陸思想の最新動向に注意を払っていたことはよく知られている。ヒュームもスミスも、フランス思想に対して正面から応答することで、自身の思想の重要な部分を提示した。また経済学の場合、英語からフランス語へ翻訳出版されて広く読まれたことで、啓蒙の共通言語として新しい学問が成立し、社会や人間性の進歩の追求という啓蒙の目標に対するスコットランドの貢献を大いに高めたという側面もある²⁾。スコットランド啓蒙の精華としての体系的・経験主義的な社会の学問である道徳哲学や経済学は、土着と外来の諸要素の有機的統合であった。スコットランド啓蒙思想が社会の学問として異例の生産性を発揮したのは、自然法や共和主義、キリスト教という異なる思想的伝統の相克が、スコットランドにおいて激しい発酵を経験して、新しい道徳哲学や経済学を生み出すことに大きく影響したからであったことは、ほぼ間違いない（田中, 2013b, p. 115）。

-
- 2) 英語 (English) は厳密な意味ではスコットランド啓蒙思想家たちの母国語ではなかった。18世紀のスコットランド人は英語にゲール語 (Gaelic) が混ざったスコットランド語 (Scots) のネイティブであった。ヒュームが自身のスコットランド語風 (Scotticisms) を一掃しようと骨折ったことは有名である (Allan, 2002, p. 38)。詩人のジェイムズ・ビーティ (James Beattie, 1735-1809) は『スコットランド語風』 (*Scotticisms, Arranged in Alphabetical Order, Designed to Correct Improperities of Speech and Writing*, 1779) を書いて、同国人の言語的な障害の克服を助けようとした (Allan, 2002, pp. 38-39)。しかし『エコノミスト』誌の二代目編集長 (1860-1877年) を務めたウォルター・バジヨット (Walter Bagehot, 1826-1877) によれば、ヒュームの英語は英語らしい慣用語法に近いものの、その語法はしばしば間違っていたという。いかにもイングランド人が使いそうな言い回しに見えて実際にはまず使わない語法がヒュームの著作には見られ、その一節が重要であればあるほど、慣用語法との微妙な差異に読者の注意が逸らされ、分析のために読書を中断させられて理解に困難を来すとバジヨットは述べている (Bagehot, 1881, pp. 272-273)。対照的にスミスの英語は、スミス自身の読書体験で出会った他人の著書の中の言い回しを真似て自分でも使っているため、著作でしか使わないような重々しい文語体で、口語体の慣用語法とは程遠く、またイングランド人には見られない使い方ではあるが、意味は明瞭であり、理解のために繰り返し読む必要がない点で、ヒュームにはない利点があるとバジヨットは述べている (Bagehot, 1881, p. 273)。

2. スコットランド啓蒙の道徳哲学——社会についての新しい理解

スコットランド啓蒙の中でも道徳哲学は、それに先立つ時代との影響関係が最もよく研究されてきた分野である³⁾。スコットランド啓蒙の道徳哲学に対する17世紀思想の影響としては、サミュエル・プーフENDORF (Samuel Pufendorf, 1632-1694) 以来の自然法学がグラスゴー大学の初代道徳哲学教授ガーショム・カーマイケル (Gershom Carmichael, 1672-1729) を通して道徳哲学教育に導入された影響や、古典共和主義がアンドリュー・フレッチャー (Andrew Fletcher of Saltoun, 1655-1716) を通して導入され、エディンバラ大学道徳哲学教授アダム・ファーガソン (Adam Ferguson, 1723-1816) を頂点として継承されていった系譜などが強調されてきた。しかしいずれにせよ啓蒙は、暴力的支配ではなく洗練されたコミュニケーションを通じて社会を変革し、また異文化社会が相互理解を推し進め、平和で豊かな共存を目指すという「社交性」(sociability) あるいは「社会性」(sociality) の思想であったことが決定的に重要である (田中, 2013b, p. 22)。本節ではスコットランド啓蒙の道徳哲学において最も重要な社交性の議論に焦点を絞り、古代ローマのストア哲学の影響を取り上げてみたい。

ストア哲学は、モンテーニュ (Michel de Montaigne, 1533-1592) をはじめとするネオ・ストア派によって16世紀のヨーロッパ大陸で再興し、フランドルの人文主義者であるリプシウス (Justus Lipsius, 1547-1606) などにより、ストア哲学の「節制」(moderation)、「自制」(self-discipline) などの概念が近世思想に導入された。ただし古代のストア派が「自制」を「自然に従う」など受動的な態度と結びつけていたのに対して、ネオ・ストア派は商業活動など、世俗的な領域で有用な資質と見なして再評価し始めた (Kaye, 1924, p. xcix; Muller, 1993, p. 47)⁴⁾。ネオ・ストア派は特にオ

3) Bryson, 1945は、現在でもスコットランド啓蒙の道徳哲学への入門書として最適である。

4) ルネサンス期の道徳・政治思想の用語がストア哲学を出典としていた点を最

ランダで影響力を持ち、自然法学者のグロティウス（Hugo Grotius, 1583–1645）はストア哲学から人間的自然としての社交性の概念を受容した。ネオ・ストア派の哲学は18世紀にオランダで教育を受けたスコットランドの知識人たちによりスコットランドへ移植され、人間的自然としての社交性こそが国家の管理を不要とする「自制」の根拠となるべきとの議論の出発点となった（Muller, 1993, p. 47）。このようにストア哲学を介した社交性の議論の受容と発展こそ、スコットランド啓蒙の道德哲学がヨーロッパ大陸思想と共有していた課題であり、大きな思想的貢献を成したトピックなのであった。

スコットランド啓蒙の道德哲学はフランシス・ハチスン（Francis Hutcheson, 1694–1746）に始まると見なされているが、ハチスは善悪の区別をストア哲学の長所と捉え、徳を知覚する能力としての「道德感覚」（moral sense）に基づき、ストア哲学の教えに従い有徳に行動することで公益が実現できると論じ、バーナード・マンドゥヴィル（Bernard Mandeville, 1670–1732）を批判しようとした（Moore, 1994, p. 26; Phillipson, 2000, p. 72）。

マンドゥヴィルはオランダ生まれでイングランドに移住した風刺作家であるが、ストア哲学を批判することで近世の商業文明の社交性を風刺しようとした。彼が『ブンブンうなる蜂の巣』（*The Grumbling Hive*, 1705）や『蜂の寓話』（*The Fable of the Bees*, 1714）を書いたとき、ストア哲学の古典であるマルクス・アウレリウス（Marcus Aurelius, 121–180）による『省察録』（*The Meditations*, late second century CE）の中の言葉を思い浮かべていたことは想像に難くない。「蜂の巣の利益でないものは、蜂の利益ではない」（*Meditations*, 6. 54, p. 158）。

初に強調したのはクウェンティン・スキナーである（Skinner, 1978, volume 1, p. xiv）。スキナーはモンテーニュの『エッセー』（*Essais*, 1580–1595）におけるストア思想の役割の重要性と、モンテーニュの影響によりストア哲学が16世紀末にフランスとオランダで広範に受け入れられるようになった過程を分析している（Skinner, 1978, volume 2, pp. 275–284）。

マンドゥヴィルはこの考えに賛成したであろうが、それはマルクス・アウレリウスとは別の理由によってである。マルクス・アウレリウスは、私益は公益と一致すると見なしていた (*Meditations*, 6. 44, p. 155; 10. 6, p. 233)。宇宙も社会も有機的な統一体であり、個別の物質や個々の構成員の単なる寄せ集めではないからである (*Meditations*, 7. 13, pp. 163–164; *Meditations*, Hutcheson's footnote, p. 163)。

マンドゥヴィルは私益が公益に貢献する可能性を認めながらも、それは私益の追求そのものが悪徳だからであると論じた。あらゆる商業はその中に悪徳を含んでいるのであり、私益の追求はストア哲学が説いたほど善悪に中立的なものではないとマンドゥヴィルは主張した (*FB*, volume 1, p. 61)。マンドゥヴィルはストア哲学を批判することを通じて、『蜂の寓話』の副題に付けた「私悪は公益」(Private Vices, Publick Benefits) とのキャッチフレーズによって人間の社交性を表現し、繁栄しつつあった近世の商業社会を風刺したのであった。

ハチスンがマンドゥヴィルを批判し、人間の社交性を擁護しようとしたとき、ストア哲学を援用することには思想的に正当な理由があったのである。『美と徳』(*An Inquiry into the Original of Our Ideas of Beauty and Virtue*, 1725)においてハチスンは、人間には美と徳を追求する道しるべとなるように「美的感覚」(sense of beauty)と「道徳感覚」が備わっており (*BV*, II. I. VIII, p. 99)、それらに動機付けられた行動は必ずしも利己的ではなく「公平無私」(disinterested)であり、弱い存在でしかない人間はそのような内部感覚に従って私益を追求しなければ生き延びることができないと論じた (*BV*, I. VIII. II, pp. 78–81)。道徳哲学者としてのハチスンの新機軸は、美と徳についてのストア哲学の議論を彼独自の美的感覚論と道徳感覚論に発展させた点にある⁵⁾。これらの内部感覚は、生存のために

5) 内部感覚を美的感覚と道徳感覚に分けたハチスンの発想は、おそらくキケロに負っている (*Cicero, On Duties*, I. 153, pp. 59–60)。ハチスンは「感覚」(sense)を能動的な理性とは区別された精神の受動的な側面として理解してい

人間に備え付けられ、人間の行動を私益ではなく公益に貢献するように動機付ける能力なのであった (BV, II. VII. XII, p. 197)。このような能力は私益とは独立に働き、しかも公益にとって必要であるとのハチスンの描写がストア哲学に基づくものであることは、ハチスン自身も明示している (System, volume 1, pp. 54, 61)⁶⁾。

アダム・スミス在学中のグラスゴー大学では、ハチスンの影響下でギリシア・ラテンの古典研究が再興し (Fowler, 1882, p. 179)、その中からストア哲学の古典であるマルクス・アウレリウス『省察録』のハチスンによる英訳が生まれた (Meditations)⁷⁾。ハチスンがストア派であったことは、彼の著作だけでなく、この英訳本に付けられたハチスンによる序文からもうかがわれるところである (Meditations, Introduction, pp. 2-3)。スコットランド啓蒙におけるストア哲学の言語は、この英訳本からスミスの道徳哲学に継承され、やがてスミスの『国富論』 (An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776) において経済学の言語にも発展していく。これについては次節で論じる⁸⁾。

ハチスは、現在ではスコットランド啓蒙の道徳哲学の創始者と見なされているが、ハチスンの哲学が注目されてきたのは、とりわけヒュームの哲学との関連においてであった。ノーマン・ケンプ・スミス (Norman

る (Scott, 1900, p. 186)。

- 6) System, volume 1, pp. 57-58 も参照。また p. 61 にある脚注は、キケロによるストア哲学の特徴付けを是認している (Cicero, On Moral Ends, I. 3, p. 4)。
- 7) この英語版はハチスンとジェイムズ・ムーアによって1741年の夏に翻訳され、1742年に刊行された (Scott, 1900, p. 246)。最初の2巻をムーアが訳し、残りをハチスンが担当したとされている (Scott, 1900, p. 144)。本稿におけるマルクス・アウレリウスに関する論考は、スコットランド啓蒙の文脈を踏まえるため、この英訳版に基づいている。
- 8) スミスの『国富論』は政策論において、必ずしも杓子定規な自由放任主義に留まらないローマ人的な実践性を持っているが、それもこのストア哲学の言語からもたらされていると私は考えている。

Kemp Smith, 1872–1958) からデイヴィッド・ノートン (David Fate Norton, 1937–2014) に至るまで多くのヒューム学者は、ヒュームが哲学の世界に足を踏み入れたのはハチスンの道徳哲学の影響によるものであり、ヒューム哲学をハチスン哲学の発展として考えてきた (Kemp Smith, 1941, p. 12; Norton, 1982)。しかしながらスコットランド啓蒙の道徳哲学の中心論点である社交性についての両者の議論を見ると、ハチスンとヒュームの哲学上の関係はそれほど単純ではない。

ヒュームはマンドゥヴィルの逆説を、マンドゥヴィルが批判しつつもその実うまく逆説に取り込んで利用したストア哲学の厳格主義的な道徳論を放棄することで解決しようとした。『人間的自然論』 (*A Treatise of Human Nature*, 1739–1740) においてヒュームは、社交性の議論を経験と観察に基づく方法によって、より論理的に、より信頼性のある形で書き直そうと試みた。ヒューム自身の言葉では、「実験的方法を道徳の論題に導入する試み」 (an Attempt to introduce the experimental Method of Reasoning into Moral Subjects) ということになる。そのためヒュームにとっては、ハチスンが信頼を寄せた厳格主義で規範的なストア哲学よりも、エピクロス派や懐疑派の現実主義的な道徳論の方が妥当で有益なのであった。

『道徳政治論集』 (*Essays Moral and Political*, 1742) の中でヒュームがマンドゥヴィルの逆説を批判した時に拠り所となったのは、このような意味での現実主義である。マンドゥヴィルの逆説は、人間的自然の尊厳を破壊するような極端な描写をして「人間的自然の弱さのみを力説」した上で、そのような弱い「人間と、最も完全な知恵を持った存在とについての新たな、しかも理解できないような比較をすることによって」作り上げられたものとヒュームは見た (*Essays*, pp. 82–83)。ヒュームによれば、マンドゥヴィルの逆説をめぐる論争は、結局は語法の問題である。公共精神や愛国心、友情、徳の実行には快感や他人からの称賛が伴っているため、公平無私ではあり得ず、徳の追求も結局は私利に過ぎないなどと強弁して言葉を乱用しているだけだとヒュームは批判する (*Essays*, pp. 83–86)。

ヒュームの現実主義志向は、『政治論集』(*Political Discourses*, 1752)に収録された「懐疑派」(“*The Skeptic*”)と題するエッセイの中で、古代の懐疑派への是認につながっていく。美や徳はストア派やハチスンが論じたように、それ自体で完結して存在するものではなく、古代の懐疑派が述べていたように、様々な感情や美的感覚に左右される相対的なものである(*Essays*, pp. 162–163)。ヒュームによる懐疑派擁護の背景には、美や効用は精神における観念連合によって現れる知覚に過ぎず(*Essays*, pp. 165–168)、運や偶然、確率によって影響を受けるのであり、ハチスンが論じたように美的感覚や道徳感覚によって均一的に知覚されるほど信頼できるものではないとのヒューム自身の議論があった。懐疑派の議論に沿ってヒュームは、「一言で言えば、人間の人生は理性よりも運に支配され、まじめな活動というよりもつまらない気晴らし(*dull pastime*)と見なされるべきであり、一般的原理よりも個々の気まぐれ(*particular humour*)に左右されるものである」と述べた(*Essays*, p. 180)。

ヒュームはストア哲学の代わりに、キケロ(Marcus Tullius Cicero, 106–43 BCE)に多くを負っており、特にキケロがエピクロス派や懐疑派から受け継いだ現実主義的な道徳論を積極的に受け入れた。キケロの道徳論は、ストア哲学だけでなくエピクロス派や懐疑派から多くを取り込んだ折衷的なものであった。ハチスンはキケロの中で規範主義的なストア哲学に好意的な部分を重視しつつキケロをストア派として読んだ(Moore, 1994, p. 26)。道徳感覚について論じる中でハチスンは、キケロの説明によりつつ、人間の願望を全て自愛心や個人の幸福への欲望に帰するエピクロス派の考えを拒否した(*PA*, pp. 134–135)。対してヒュームはキケロを懐疑派として理解し、特に確率や錯覚、美や徳の判断基準としての功利性の重視など、懐疑派の現実主義的な側面を評価し、そこに自身が構想する実験的方法に基づく道徳論との親近性を見ていた。エピクロス派の道徳論からヒュームは、『人間的自然論』で取り上げる正義と自然的徳との区別や、他人の所有物への欲求を控える慣習・協定から所有権が確立されるこ

と、功利性や快感を判断基準とする道徳的是認などの論題を受け取ったのである (Moore, 1994, pp. 27, 28, 36, 49–50)⁹⁾。

ハチスンはおそらく、1740年から1741年にかけてアムステルダムで発行された *Bibliothèque raisonnée* 誌掲載のヒューム『人間的自然論』第一巻と第三巻についての批判的な書評の匿名の著者であり (Moore and Stewart, 1993a; Moore and Stewart, 1993b, pp. 24–26)、これら一連の書評からヒュームはハチスンとの溝に即座に気付いたであろう。しかしながらハチスンの哲学を自身の立場と調停しようとしたヒュームによる当初の礼節ある試みは、楽観的であると同時に無理があった。ヒュームの道徳哲学は、トマス・ホブズ (Thomas Hobbes, 1588–1679) によってよみがえりマンドゥヴィルによって利用されたエピクロス派の伝統に根ざしており、そもそもストア派のハチスンがそのあらゆる語法において対立してきた流れを引く哲学であったからである (Phillipson, 1989, pp. 48–49; Moore, 1994, pp. 53–54)。1744年にハチスンが、ヒュームのエディンバラ大学道徳哲学教授就任に反対したとしても、ヒュームは別に驚きはしなかったはずである (Stewart, 1995)。ヒューム『道徳原理探求』 (*An Enquiry concerning the Principles of Morals*, 1751) におけるハチスン哲学に対する「上品」(polite) ではあるが苛烈な応答は、ヒューム哲学とハチスン哲学の最終的な決裂であったと見ることも出来よう。

親友同士であったヒュームとスミスの思想上の親近性にもかかわらず、両者の道徳哲学上の関係もそれほど単純ではなく、それに応じてストア哲学に対するスタンスにも違いがある。社交性に関するスミスの理論は、ヒュームだけでなく、グラスゴー大学での恩師であるハチスンの哲学からも大きく影響を受けていた。ハチスンの講義はスミスにとってストアの道

9) エディンバラ大学時代以来のヒューム哲学のエピクロス派的伝統の背景については、Moore, 1994, pp. 32–33を参照。

徳哲学への入門であったと同時に、ホップズとマンドゥヴィルによる懐疑主義からの攻勢に対してストア哲学の言語を救い出す意図も持っていた(Phillipson, 2000, p. 72)。人間には他人の境遇に関心を持ちその幸福を喜ぶシンパシーが備わっており、人間は完全に利己的であるわけではないとスミスは『道徳感情論』(*The Theory of Moral Sentiments*, 1759)の冒頭で述べ(*TMS*, I. i. 1. 1, p. 9)、自愛心から道徳的是認を説明するホップズやマンドゥヴィルから直ちに距離を取った(*TMS*, I. i. 2. 1, pp. 13–14)。

スミスもヒュームと同じく、マンドゥヴィルの逆説を言葉の誤用として批判した。マンドゥヴィルは称賛を求める行為の動機を全て虚栄心(vanity)に求めることで、善悪の区別を取り払ってしまったとスミスは批判し(*TMS*, VII. ii. 4. 6–7, p. 308)、善悪を区別することで有徳な行為を奨励したプラトン(Plato, 427–347 BCE)やアリストテレス(Aristotle, 384–322 BCE)、ストア哲学者のゼノン(Zeno, 335–263 BCE)と対比した(*TMS*, VII. ii. 4. 1, p. 306)。マンドゥヴィルは虚栄心という言葉、称賛に値する以上に称賛を求める真の意味での虚栄心だけでなく¹⁰⁾、称賛に値する善行や名声を求める適切な行為まで含めた広い意味で使っており(*TMS*, VII. ii. 4. 8, p. 309)、「言葉の曖昧さ」を乱用しているのである(*TMS*, VII. ii. 4. 11, p. 312)。マンドゥヴィルの「私悪は公益」という誤謬は、感情の完全な統制は不可能であるから人間には徳が達成不可能であって、人間の行動は全て徳を求める振りをしているだけの騙しであるとの主張をしつつ、もし感情の完全な統制が実現したら勤労や商業に終止符を打つことで社会にとっては破壊的であるとの全く別の主張を組み合わせた詭弁であるとスミスは見る(*TMS*, VII. ii. 4. 12, pp. 312–313)。

しかしスミスは、マンドゥヴィルの逆説をストア哲学の厳格主義的な道徳論を放棄することで解決しようとしたヒュームの方法には賛成できな

10) スミスは虚栄心を「根拠のない称賛を喜ぶこと」とも定義している(*TMS*, III. 2. 4, p. 115)。

かった。道徳哲学におけるヒュームからスミスへの影響の大きさについては、多くの研究によって指摘されてきた (Scott, 1900; Taylor, 1965; Hope, 1989; 田中, 2003など)。ただしここでは影響の実質的な内容が問題である。スミスがヒュームの道徳哲学を叩き台にしたことは間違いない。しかしそれは単なる受容や発展とは限らない¹¹⁾。ヒュームは懐疑派の現実主義的な道徳論から、美や徳の判断基準としての功利性の重視などの論題を受け取り、徳の是認の問題を功利性で解決しようとしたが (TMS, IV. 2. 3, p. 188)、スミスは功利性を行為の主要な判断基準とすることは「抽象的で哲学的」と批判する (TMS, IV. 2. 2, p. 187)。徳の是認は、便利で上手く作られた建物に満足することや、たんすを褒めることと同じではあり得ないからとスミスは述べる (TMS, IV. 2. 3-4, p. 188)。功利性は是認の一部にはなり得ても第一の根拠ではなく、是認にはそれとは異なった適宜性の感覚 (sense of propriety) が何よりも優先的に伴うというのが、スミスのヒューム批判の要点である (TMS, IV. 2. 5, p. 188; VII. iii. 3. 17, p. 327)。

適宜性が功利性に優先するとのスミスの主張は、徳の是認だけでなく他の様々な論題でも繰り返し現れる。例えばテイスト (taste) は本来、役に立つからではなく、正しく優美であり、目的と精密に適合しているから是認されるのであって、功利性は是認を促す最初の概念ではなく、明らかに後からの思い付きの説明であるとスミスは論じる (TMS, I. i. 4. 4, p. 20)。司法や刑罰の第一の根拠も、社会秩序の維持という功利性ではなく、被害者への関心であり、犯罪行為そのものを適宜性の感覚に基づいて否認することに存する (TMS, II. ii. 3. 9-12, pp. 89-91; I. ii. 3. 4, p. 35およびII. i. 5. 10, pp. 77-78も参照)。また怒りや恐怖といった感情に対する自己統制 (self-command) というストア的な徳も、放縦に振る舞った場合の結果に

11) スミスの思想をヒューム思想の徹底した申し子と解釈するのがフィリップソンである (Phillipson, 2010)。2010年出版のフィリップソンのスミス伝については、詳しくは古家, 2015を参照。英語の原著は25,000部以上売れ、著者はエディンバラ大学を定年退職した後も講演やシンポジウムで欧米各地を飛び回っている。

対する功利的な計算からではなく、自己統制そのものに対する適宜性の感覚によって発揮される（*TMS*, VI. concl. 3-5 and 7, pp. 263-264）。

社会秩序形成の原理に関しても、スミスは同様の観点からヒュームを批判する。ヒュームは君主制などの統治体制の正統性を、実際の統治期間の長さや、平和や安定など、その体制によってもたらされた社会全体への功利性に求めた（*THN*, III. iii. 5, p. 393）。対照的にスミスは、身分の上下や社会秩序の基盤は富者や権力者の境遇に対する大衆の尊敬や感嘆に求められるのであって、富者や権力者の善意から大衆が個人的に期待できる功利性ではないと論じる（*TMS*, I. iii. 2. 3, p. 52; VI. ii. 1. 20, pp. 225-226）¹²⁾。

ヒュームが影響を受けたエピクロス（Epicurus, 341-270 BCE）についてもスミスは、エピクロスは徳がその「功利性」に存すると考えた点を批判した（*TMS*, VII. ii. 2. 9, p. 297）。例えば慎慮（*prudence*）の徳は「苦痛を防ぎ、安楽や快樂をもたらす傾向」のゆえに快いとエピクロスが見なした点にスミスは反対した（*TMS*, VII. ii. 2. 8, pp. 296-297）。スミスは徳をその功利性のためではなく、それ自体の価値で追求するに値するものと考えていたプラトンやアリストテレス、ストア派の方がエピクロスより優れていると考えた（*TMS*, VII. ii. 2. 4-6, pp. 295-296; VII. ii. 2. 12-14, pp. 297-298; VII. ii. 2. 16-17, pp. 299-300）。道徳哲学者としてのスミスは、特に経済学史研究でこれまでしばしば解釈されてきたような意味での功利主義的な哲学者とは言えないのである。

他方でスミスは、ヒュームがエピクロス派や懐疑派の道徳論から受け継いだ現実主義的な側面を評価し、むしろハチスンが好意的に受け入れたストア哲学の規範主義的な側面に批判の目を向けた。この意味でスミスのストア哲学に対するスタンスは、肯定的だったハチスンだけでなく、否定的

12) 功利性をめぐるヒュームの議論をスミスは単純化し過ぎていたかもしれないが、ヒュームは匿名で出版した書評の中でスミスの『道徳感情論』を好意的に評価しつつ、スミスの誤りを正すことは忘れなかったのである（Raynor, 1984; Raphael and Sakamoto, 1990）。ヒュームとスミスを効果的に対比した研究として、Otteson, 2002, pp. 50-58; Pack and Schliesser, 2006が有益である。

だったヒュームとも異なり、独特のものである。スミスは慈善や憐憫を説き富や地位の魅惑に警告を発する道徳家たちを尻目に、身分の上下や社会秩序と平和が、目に見えにくく不確実な知恵や徳ではなく、明白に違いが分かる出自や富に基づいているという現実を、道徳家たちの教えの正しさとは別に事実として認め、むしろ肯定的に捉えている (TMS, VI. ii. 1. 20, p. 226)。この側面では、功利性から統治の正統性を捉えたヒューム以上に、スミスは現実主義的な発想を受け入れていたとも言えるほどである。不思議な道徳哲学者である。

ただ、ハチスンやヒュームと較べて、スミスはストア哲学に対して公平な評価をしていたと見なすことは可能であろう。スミスは「無心」(apathy)への強い要求など、徳に関して過度に規範主義的な点をストア哲学の短所と見なし、ヒュームと同様、距離を置くスタンスを取ったが、全体としては「自制」の概念など社交性に関する議論に対してハチスンが有用と見なしたストアの道徳哲学の長所を評価した (Forman-Barzilai, 2010, p. 7)¹³⁾。特にスミスはストア哲学を、富や勢力、権力などの根源的欲望の対象を追求する上で「ある一定の秩序、適宜性、思慮を守ること」を教え (TMS, I. iii, p. 58)、行き過ぎた野心を批判していた点など、利己的な情念につい

13) 『道徳感情論』でスミスが依拠したストア哲学の出典は、エピクテトス『語録』(Discourses, c. 108 CE) および『手引』(Enchiridion, c. 125 CE)、マルクス・アウレリウス『自省録』、キケロ『義務論』(On Duties, 45 BCE)、『善悪の究極』(On Moral Ends, 45 BCE) および『法律』(On the Laws, 52 BCE)、セネカ『対話』(Dialogues, early to mid-first century CE) および『書簡』(Epistles, early to mid-first century CE) である。これらの古典のいくつかは、スミスの年少時にスコットランドの学校で教材として広く用いられていた (Phillipson, 2010, pp. 19-21)。スミスは年少時からストア哲学を読んで称賛していたとされている。またスミスはオックスフォード大学ペリオル・コレッジ留学時代(1740-1746年)にギリシア語を習得し、古代ギリシアの著作に精通するようになった。古代ギリシアについてのスミスの学識は、質量ともにヒュームやリードなど他のスコットランド啓蒙思想家たちをはるかに凌駕するものであり (Bagehot, 1881, p. 252)、マルクス・アウレリウス『自省録』の利用に際しても大いに寄与したものと思われる。スコットランド啓蒙思想においてストア哲学は、もはや妥当性を失ったと見なされていたアリストテレス哲学に取って代わる思想的枠組みでもあった (Stewart, 1991; Oslington, 2011, p. 6)。

での優れた見解として評価した (TMS, I. iii, pp. 58–60 and I. iii. 2. 9–12, pp. 58 and 60–61)。

またスミスは現実主義的な発想から、徳を考察する上で「完全な存在」(a perfect being) がどのように行動すべきかという「権利問題」(a matter of right) ではなく、人間のような「弱く不完全な」(weak and imperfect) 存在が実際にどのように行動しているかという「現実問題」(a matter of fact) に留意する必要も指摘した (TMS, II. i. 5. 10, p. 77)。ヒュームのストア派批判を受け入れたスミスは、ストア哲学の「名誉ある」短所は「人間的自然の能力範囲をはるかに超える完全性」を説いたことと考えていた (TMS, p. 60; TMS, III. 3. 8 and 11, pp. 139–141)¹⁴⁾。ストア哲学に沿ってスミスは行き過ぎた野心への警告をしばしば繰り返しているが (TMS, I. iii. 2. 7, p. 57; I. iii. 3. 8, p. 65; III. 3. 31, pp. 149–150)、しかし同時にスミスは、このような野心が「見えざる手」に導かれて公益に貢献するのだと述べ (TMS, IV. 1. 10, pp. 184–185)、現実問題の観点から野心を肯定的に捉える側面も見せている。スミスは人間の情念が公共善に貢献する上で発揮できる有用な能力に注目し、古代社会よりも富裕になった近世商業社会により相応しい情念や感情についての新しい道徳哲学を目指すこととなる。スミスの道徳哲学はストア哲学やハチスンを始め、伝統的な道徳哲学の権利問題重視から、ヒュームに影響を受けて現実問題重視にスタンスを変えた点に長所があり、それゆえに経済学の源泉となり得たのだと見なすことは可能であるし、間違いでもない。とは言えスミスの場合、『道徳感情論』の道徳哲学だけでなく、『国富論』の経済学の中でも、この権利問題と現実問題の間の緊張関係が依然として残っていくことは否定できないであろう。

14) ヒュームのストア哲学批判については、Hume, *Essays*, “Of Moral Prejudices” (1742), p. 542を参照。スミスはハチスンについても、慎慮などの「下級の徳」(inferior virtues) についての現実問題を無視したと批判している (TMS, VII. ii. 3. 15–16, p. 304; VII. ii. 3. 18, p. 305)。スミスが母校のグラスゴー大学で教え始めたころ、「忘れ得ぬハチスン」に対して公然と批判的であったことが目撃されていたというエピソードも興味深い (Ross, 1995, pp. 78–79)。

スコットランド啓蒙の道徳哲学を、ハチスン、ヒューム、スミスの相互に見られる対立軸で描くことは、彼らに共通のテーマを見失わせることになりかねないかも知れない。とは言え彼らの出発点が、1707年のイングランドとスコットランドのユニオンをきっかけとする市場経済の拡大のもと、富の貪欲な追及に駆り立てられる社会の登場という新しい現実、道徳哲学が応えなければならないという共通認識であった点は明らかである。人間の社交性や徳、正義といったものは、人間に自然なものなのか、それとも各個人が自己利害を追求する上で人工的に構成する必要があるものなのか、といったテーマが、彼らの共有した問題関心であった。そしてそれらに関する考察は、大学での講義を通じて、また市場経済の成長に後押しされて拡大し始めた新たな産業としての出版を通じて、若い世代や、哲学に関心を持つ探究心旺盛な読者層に、広く伝えられなければならないという点も、彼らの共通課題であった。

スコットランド啓蒙の時代にも、フレッチャーを通じて導入され、ファーガソンに至って開花した古典共和主義の思想的系譜が存在することは、近年の国内外の一連の研究が示してきた通りである。近世ヨーロッパにおける古典共和主義は、常備軍と官僚機構を軸として中央集権化を進めた当時の絶対王政に対して、古代の共和国の理念に範を求めることで批判の論拠を提供した。

しかし名誉革命を経てユニオンが成立した18世紀の英国は、絶対主義的な国家から市場経済を重視する制限君主制へ向かい始めた。それに伴い、思想の上では古典共和主義の課題であった絶対王政の批判よりも、市場経済を基盤とする新しい社会の現実の中で、人間の自然権である自己保存や市民的権利としての自由や財産権の保障が新たなテーマとして前面に出てきた。政治の領域や国家の枠を超えて広がり始めた「社会」や「経済」という新たな領域の分析が思想上の課題となり、古典的な政治思想から新しい社会思想へ、そして経済思想へと、思想の変容が始まったのである (Pocock, 1983; 上野, 2014)。その先陣を切ったのが18世紀スコットラ

ンドの道徳哲学であった。そしてスミスが道徳哲学を母体に経済学を革新し、『道徳感情論』の次に予告していた自然法学と統治史ではなく『国富論』を書いたのも、スミスにおける権利問題重視から現実問題重視への思想的発展だけでなく、時代の要請から見ても必然的な結果であったと言えるであろう。

3. スコットランド啓蒙の経済学——スミスにおける「商人地主」像の性格付けを中心に

スミスによる独自のストア哲学理解は、ストア哲学の言語の革新的な使用法を生み出し、スミスが自然法学である狭義の正義論から、「立法者の科学」として表現されることになる新しい学問である経済学へ進む上で、新たな言語の地平を拓くこととなる。一国の富を産業の成果として分析する経済学は、ルネサンスの人文主義を起源とする啓蒙が本格的に開花した18世紀の英仏で初めて成立した。経済についての考察だけならアリストテレスや聖トマス・アクィナス (St. Thomas Aquinas, 1225–1274) にもあるが (Meikle, 1997; Blaug, 1991)、一つの体系性を持った理論として経済学が形成され始めるのは、17世紀イングランドのウィリアム・ペティ (Sir William Petty, 1623–1687) が嚆矢であり、その本格的な確立は18世紀半ば以降のスコットランドのヒューム、ジェイムズ・ステュアート (Sir James Steuart, 1713–1780)、およびスミスと、フランスのフランソワ・ケネー (Francois Quesnay, 1694–1774)、テュルゴ (Anne-Robert-Jacques Turgot, 1727–1781) などによって実現した (田中, 2013a, pp. 190–191)。

スミスはキケロをストア派の一人として理解したが、決疑論者としてのハチスンが典型的な形で採用したマルクス・アウレリウスの言語に見られた厳格な道徳的完全主義を免れている懐疑派寄りの哲学者と見なして、自身の道徳感情論にキケロの言語を導入した。これがヒュームにおいてと同様、スミスの経済学への不可欠な第一歩であった。政策論としての経済学の形成は、ヨーロッパ大陸からスコットランドへ移植された自然法学の粹

内で単なる正義論に留まっていたままでは不可能であった。そのためにはマンドゥヴィルに対抗して、日用必需品が悪徳を犯すことなく供給されるメカニズムを描き、美的感覚をはじめとする人間の情念や感情の理論を練り上げ、慎慮や儉約を、富と徳の双方を同時に実現できる適宜に抑制された感情として描くことのできる新しい言語の洗練が必要であった。

本節ではキケロの『大カトー、または老境について』（*Cato maior de senectute*, 44 BCE）を、スミスがストア哲学の言語を経済学の言語に発展させるにあたって手掛かりを提供した重要なテキストとして取り上げる。キケロは、富と徳を同時に実現できる職業として農業を称賛するこの小著が家政学（*economicus*）に関するものであり、その原点がクセノフォン（*Xenophon*, c. 431–c. 352 BCE）にあることを明確に述べている。

多くの意味でクセノフォンの著作は大変有益である。読む際には注意深く読まれるよう、あなたに乞いたい。その著作では農業がかなり詳細に称賛されている。その著作は私有財産の管理運用について論じており、「エコノミックス」と呼ばれている（*Cato maior*, Chapter XVII, p. 243; *Xenophon*, *CEconomicus*; Donaldson, 1775, p. 28も参照）。

キケロは、「老境は私たちからほとんど全ての楽しみを奪ってしまう」というのは本当だろうかと問う（*Cato maior*, Chapter V, p. 223）。老境はむしろ逆に農業の喜びをもたらすと、キケロは力説する。農業は楽しいのと同程度に有益でもあり、「農夫は大地と関係を持ち、大地は人間に自制を失わせるものではなく、受け取った労働に対する利息なしに報いることなく、時には少ない場合もあるものの、大抵は大変大きな利息とともに報いてくれるのである」（*Cato maior*, Chapter XV, p. 240）。農業はまた、私たちに自然の喜びと楽しみをもたらしてくれる（*Cato maior*, Chapter XV, pp. 241–242）。老境にとって最高の職業でもある。

大地の耕作で楽しんでいる老境の人々は、哀れむべき存在なのであろうか。私の意見では、むしろそれより幸福になれる人々が他にいるのかどうか、分からないほどである。大地の耕作は人類の全ての民族にとって有益であるから、その職務の遂行において幸福になれるだけでなく、私ですでに述べた楽しみからも、また人間の食べ物と関連するあらゆる物事に満ち溢れていることから、幸福になれるのである。そのため、これらの物事に対して欲求を持つ人々もいるので、私たちは楽しみと良い関係を築くことができるであろう (*Cato maior*, Chapter XVI, pp. 242–243)。

マルクス・アウレリウスは無難で静穏な田園での引退生活を理想とし、「狼狽と慄き」に満ちた都市での野心的な生活に批判的であったが¹⁵⁾ (*Meditations*, XI, 22, p. 275; *Meditations*, Hutcheson's footnote, p. 275 も参照)、彼の道徳的厳格主義は、野心が老境の生活を活気づけ、農業への従事を促し、この最も生産的で徳な職業を通じて富と徳を実現する可能性を排除してしまつた¹⁵⁾。スミスは『国富論』において、キケロの言語を洗練し、都市の

15) 『道徳感情論』の最終第6版(1790年)の第7部で新たに付け加えられた文章において、スミスはマルクス・アウレリウスに批判的になり、ストアの二つの道徳原理である「神の摂理への最も完全な服従と、人間の営みの傾向が引き起こすことの出来る全ての出来事に対する最も完全な満足」のうち、マルクス・アウレリウスは二つ目の原理の主唱者となつたと述べている。マルクス・アウレリウスは「柔和で人道的な、慈愛に満ちた」哲学者であったが、人間の持つ自然的ではあるもののある種の完全な社交性を説いた (*TMS*, VII, ii, 1. 35 and 37, pp. 288–289)。反対にスミスは、「ストア派の実践道徳と呼び得るもの」を重視した。それは「不完全ではあるが到達可能な徳についての教え」であり、「人間にとって実行可能なものと彼らが考えたものであり、正確さではなく適宜性であり、適合性であり、好ましく相応しい行為であり、[……] キケロがラテン語で義務 (*officia*) と表現し、セネカが私の考えではより正確に適合 (*convenientia*) と表現したもの」であった (*TMS*, VII, ii, 1. 42, pp. 291–292)。スミスにとってストア派は、私たちの支配や管理を全く超えた「森羅万象の偉大なる指揮官」の役割に関心を持つよう私たちに教える一方、私たちに直接に影響を及ぼし最も関心を引き起こす事柄、つまり「私たちの日常生活の本来の事柄や務め」に対して、無関心で関わりを持たないように説いているように見えた (*TMS*, VII, ii, 1. 43–47, pp. 292–293)。ただしエマ・ロスチャイルドのように、この点のスミスのストア批判から、スミスが基本的に反ストア派であり「見えざる手」の概念も「非スミスの」である

商業から引退して土地の改良に従事するという理想の地主像を創り出すことで、農業と商工業のバランスを通じた富と徳の両立の道を描いていくのである。

キケロの言語を用いてスミスは、農業とそれに従事するカントリー・ジェントルマンを、二つの理由で称賛した。一つには、カントリー・ジェントルマンは近世商業社会で最も有徳な階層であるため、二つには、農業は最も生産性の高い産業であり、それに従事するカントリー・ジェントルマンは公共の利益に最も効果的に貢献することになるからである。

第一に、カントリー・ジェントルマンや農業家の徳について、スミスは何よりも彼らが党派心に最も無縁である点を強調した。

カントリー・ジェントルマンや農業家たちは、彼らにとって大いに名誉なことに、すべての人々の中で、卑劣な独占精神に服従することが最も少ない。大きな製造業の企業家は、同業の事業所が二十マイル以内に創業されれば、時には警戒するものである。[……] 農業家やカントリー・ジェントルマンたちは、反対に、彼らの近所の農場や地所の耕作や改良を妨害するのではなく、むしろ奨励したいと普通は思っているものである (WN, IV. ii. 21, pp. 461–462)¹⁶⁾。

このようなスミスの言明がキケロに沿って書かれていたことは、キケロの『大カトー、または老境について』の主人公、大カトーの言葉をスミスが引用していることから明らかである。

最も勇敢な人間や最も屈強な兵士が生まれるのは、農民の階層からである。彼らの職業は最も高く尊敬されており、彼らの暮らしは最も安心確

と解釈するのは行き過ぎであろう (Rothschild, 2001, pp. 132–134)。

16) 農業家に党派心がない点については、WN, I. x. c. 23, p. 143; IV. viii. 34, p. 655でも論じられている。

実であり、敵意をもって見られることが最も少なく、その職業に従事する者たちは不満を抱くことが最も少ない (Cato, *On Farming*, pp. 2-3)¹⁷。

ここでスミスにとってキケロの言語は、アディスン流の上品さ (politeness) に関する任意主義的言語 (voluntarist language) に対するスミスなりの批判的スタンスを示している。この意味では、スミスは都会風の洗練に好意的なポライト派ホイッグの見解よりも、ジェントルマンの徳を称賛するカントリー派ホイッグの見解に近い立場を表明している。スミスは、都会の居酒屋やコーヒーハウスなどの「自発的な団体」における上品な会話が、「団体の精神」や党派的な激情を阻止する上で効果的であるとのポライト派ホイッグの主張には、確信が持てなかったように思われる¹⁸。スミスはむしろカントリー・ジェントルマンと対比しつつ、都会の人間の党派心を軽蔑していた。

都市の住民は、一つの場所に集まるとあっさり結託し易いものである。都市で営まれている最も取るに足らない商売は、それゆえどこでも結託しやすいのである。たとえ結託しなかったとしても、団体の精神や、よそ者への警戒心、徒弟を採ることや彼らの商売上の秘密を伝え合うことへの嫌悪感が、普通は彼らの中にはびこっており、多くの場合、自発的な結託や取り決めによって、条例で妨げることのできない自由競争を妨げるよう、彼らに教えるのである (WN, I. x. c. 22, p. 142)。

党派心は無縁であることに加えて、スミスは農業の持つ有徳な性質として、その職業が広範な知識と優れた判断力、理解力を必要とする点を挙げている。

17) この部分はWN, IV. ii. 21, p. 462に引用されている。

18) 『道徳感情論』でもスミスは上品さの徳に関して否定的である (TMS, I. iii. 2. 5, pp. 54-55)。

芸術や知的職業と呼ばれるものに次いで、〔農業ほど〕多種多様な知識と経験を必要とする仕事もないであろう（*WN*, I. x. c. 23, p. 143）。

農業家の技術や農作業の全般的な指揮管理だけでなく、多くの下位の部門の農業労働も、大部分の手工業よりはるかに多くの技能と経験を要求するのである。〔……〕普通の耕作者でも、愚鈍と無学の見本のように一般には考えられているが、これら〔材料や道具についての〕判断力と裁量において欠陥があることは滅多にない。確かに彼は、都市に住む職人よりも、社交には慣れていない。彼の喋り方は無骨で、言葉は彼らに慣れていない人たちに理解されにくい。しかしながら彼の理解力は、より多種多様な対象を考察することに慣れており、注意力の全てが朝から晩まで一つか二つのひどく単純な作業に普段は占領されてしまう職人のそれよりも大抵の場合にはるかに優れている。農村の下層の階層の人たちが都市の人たちよりもいかに優れているかは、仕事や好奇心で彼ら双方と会話を交わしたことのある人たちすべてに、よく知られていることである（*WN*, I. x. c. 24, pp. 143–144）。

産業としての農業では、したがって分業の進展に限度があり、分業による生産性向上のスピードが、製造業など他の産業に比べて遅いことを意味する（*WN*, I. i. 4, p. 16）¹⁹⁾。しかしこの点は、スミスにとって大きな懸念ではなく、分業化が困難である分だけ、農業がより多くの知識を要求することから、むしろ農業の有徳さの証拠であった。分業が進展する近世商業社会の中にありながら、農業従事者は製造業の労働者ほど、無知蒙昧にならずに済むのである（*WN*, V. i. f. 50, pp. 781–782）。

スミスが農業とそれに従事するカントリー・ジェントルマンを称賛した第二の理由、農業が最も生産性の高い産業であり、それに従事するカント

19) *WN*, IV. ix. 35, p. 676; *LJ* (A), vi. 30–31, p. 342; (B), 214, p. 490 も参照。

リー・ジェントルマンは他の職業従事者たちに較べて公共の利益への貢献度が最も高いと見る点については、スミスはキケロと同様、農業生産に自然が関わるからと述べている。

農業家の資本以上に、同量の資本でより多くの生産的労働を動かす資本はない。彼の使用人だけでなく、彼の家畜も、生産的労働者なのである。農業では、自然もまた人間とともに労働する。そして自然の労働は費用がかからないが、その生産物は最も高賃金の労働者の生産物と同じくらいの価値を持つのである。〔……〕農業に従事する労働者と、労働する家畜は、それゆえ製造業の職人たちのように彼ら自身の消費分または彼らを雇う資本に等しい価値の再生産とその利潤を引き起こすだけでなく、それよりはるかに大きな価値の再生産を引き起こすのである。農業家の資本とその利潤に加えて、彼らは地主の地代の再生産を常に引き起こすのである。この地代は、地主が農業家に使わせた自然の力の産物と見なされるであろう。〔……〕それは、人間の仕事分と見なされることのできる全てを差し引き、または相殺した後に残る自然の仕事分である。〔……〕製造業で雇われる同量の生産的労働が、それほど大きな再生産を引き起こすことはない。製造業では自然は何もせず、人間が全てを行い、再生産はそれを引き起こす人間の力に常に比例しているはずである（WN, II. v. 12, pp. 363–364; WN, V. i. a. 9, pp. 694–695も参照）。

したがって製造業は地代を生まず、富の生産性はその分だけ低いということになる。また製造業や商業、貿易の資本は、目の届かない遠方に投じられるため、不慮の事故やリスクを免れないと、スミスは述べる。

反対に地主の資本は、彼の土地の改良に向けられており、人間の営為の性質が許す限りで最も安全であるように見える。その上、田園の美しさ、田園生活の喜び、それが約束する精神の静穏、そして人間の作った決ま

りごとがもたらす不正がそれを妨害しない場所ならどこでもそれが実際に提供する自主独立は、多かれ少なかれ誰をも引き寄せる魅力を持っている。また土地を耕作することが人間の本来の目的であったように、人間はその存続のあらゆる段階において、この原始的な職業への愛好を持ち続けているように思われる (WN, III. i. 3, pp. 377-378)。

スミスの経済学におけるこのようなキケロの言語は、農業自体の持つ絶対的な優位性だけでなく、社会全体の利益への貢献に対する農業の相対的な優位性という意味においても、農業が最も生産性の高い産業であるとスミスが論じる上で有用であった。社会において最も生産的かつ最も有徳な階層としてスミスが最終的に見定めたのは、自分の土地の改良に従事し、自己利益と社会の利益を十分に理解しているカントリー・ジェントルマンであった (Phillipson, 1983, pp. 191-193, 197)。彼らは地代を稼ぐ地主であると同時に利潤を上げる農業資本家でもあり、その利害は社会のあらゆる階層の中で国富の増大と最も緊密に結びついている (WN, I. vi. 20, p. 70)。スミスが特に想定していたのは、都市の商業活動から引退してカントリー・ジェントルマンになり、地所の改良に投資するようになった「商人地主」(merchant landowner) の階層である。

都市の住民によって獲得された富は、売りに出されている土地を購入するのにしばしば使用される。そのような土地は大部分が未耕作であることがしばしばある。商人は通例、カントリー・ジェントルマンになることを熱望しており、なった際には、彼らは大抵、改良家の中でも最良の人たちである。商人は彼の財産を有利な事業に主に投資する習慣がついているが、単なるカントリー・ジェントルマンは、自分の財産を出費に使うことに慣れている。[……] これらの異なる習慣が、あらゆる種類の事業において、彼らの気質や気性に影響を及ぼしている。商人は一般的に大胆な事業家であり、カントリー・ジェントルマンは臆病な事業家で

ある。[……] その上、整理整頓や儉約、注意力といった、商業が当然のように商人に身に付けさせる習慣は、彼をして改良の事業を利潤と成功をもって実行させるのにはるかに相応しくする (WN, III. iv. 3, pp. 411-412)。

これらの商人地主こそ、国富の生産性が最も高いとスミスが見定めた階層なのである。商人地主たちはスミスにとって、老境に差し掛かった引退後の商人による農業改良という、富の生産と徳の向上を高レベルで両立できる事業の可能性を示す存在であった。これは、富と徳の同時達成は不可能としたマンドゥヴィルの主張に対する反証となり得る議論でもあった。これら引退した老境の元・商人の階層は、かつて成功した商人として身に付けた注意力や勤勉などの習慣を、最も生産性の高い産業である農業において改良事業で活かすことができるわけである。

それぞれの国情に応じて、農業の生産性を重視した農業大国フランスのエコノミストが重商主義を批判し、富の生産に対する視座を流通から生産へと向け変えて重農主義経済学を構築したのに対して、海洋国家英国のポリティカル・エコノミストは重農主義の一面性を正した上で、生産性の概念を商工業にまで拡張し、商工業の富が農業を改良するという国内の農工商のバランスと相互作用を重視する古典派経済学を生み出したと言えるが (田中, 2013a, pp. 191, 193)²⁰⁾、農業と商業の徳を兼ね備えることで富の生産を最も効果的に実現できるとしてスミスが描いた商人地主は、英国の古典派経済学の特徴をある意味で最も象徴的に支えるモデル的な階層なのであり、その描写に際して有用なツールとなったのがキケロの言語なのであった。

20) ただしフランスには商業の重要性を論じヒュームに影響を与えたジャン＝フランソワ・ムロン (Jean François Melon, 1675-1738) のような経済論者も存在したので、啓蒙時代のフランス経済学が重農主義に尽きるわけではない。米田, 2014 を参照。

1832年の選挙法改正に至るまで、英国では地主階層が他の追随を許さない支配階層であった (Smout, 1985, pp. 261–262)。そのような地主階層の威信と格式が、商人による土地購入の需要側の要因となった。スミスが道徳哲学教授を務めたグラスゴーでは、17世紀を通じて商人が周辺の土地市場に深く関わり、17世紀末までには婚姻や抵当貸付、土地購入を通じて地主階層と混じり合い、グラスゴー近郊では誰が地主階層出身で誰が商人出身か見分けがつかなくなっていたほどであったという (Smout, 1985, p. 263)。18世紀に入ると、植民地を拠点とするスコットランドの冒険商人が米大陸やアジアで築いた富を持ち帰り、自身の成功を誇示するために地所を購入することが一般的となった。特に1783年に米国独立戦争が決着し、いわゆる「第一英帝国」(The First British Empire) が解体し終焉を迎えたことが、多くの植民地商人や金融業者に商業から引退して地主階層に加わるきっかけを与えた。1815年までには、グラスゴー周辺地域はタバコ貴族や砂糖豪商の地所で囲まれ (少なくとも62の地所が1770年から1815年の間に買収された)、エディンバラ周辺地域は首都の法曹貴族たちの隠退所となり、ボーダーズ地方やハイランド、ローランド東部の一部ではインド帰りの豪商 (nabob) が異彩を放ち、スコットランド全国を通じてカリブ海やインド、アジアからの帰還者たちが土地を買収した。彼らが活発な土地市場で最も有力な勢力となり、農業改良や道路建造、村落の開発、農村工業への融資などの重責を担った (Devine, 2005a, pp. 31–32; Devine, 2005b, p. 56; Devine, 2005c, p. 79; Lee, 2005, p. 136; Murdoch, 1998, pp. 69–70)²¹⁾。トマス・デイヴァインは、1770年から1815年までの時代には「商人たちが土地を買うことをかつてないほど熱望し、土地を取得するのに必要な財源を持つ人々の希望をかなえるに十分な土地がまだ存在していた。地所ほど、18世紀の実業家の社会的、美的、そして財政的要求に

21) Allan, 2002, pp. 165–185; Colley, 1992, pp. 122–139; Devine, 1971; Devine, 1978; Devine, 2003; Macinnes, 1994 も参照。

応え得る商品は、他になかったのである」と述べている (Devine, 1971, p. 235)。商人地主は地主階層以外での人生経験が豊富で、彼ら自身の出身である商工業階層の価値観や社会的目的を軽蔑することはなかった。彼らは中産階層と上流階層の効果的な橋渡し役となり、双方が恩恵を受けたのである (Smout, 1985, pp. 265–266)。

他方で、商人による土地の購入の供給側の要因となったのが、クリストファー・スマウトが「生活様式の変革」(the revolution of manners) と呼んだ現象である。18世紀末のスコットランドの地主階層は、世紀初頭の彼らの先祖が耐え難いほど野暮な生活をしていたように思えるほど、世紀の初めよりも大きな実質所得と地代収入を享受し、建築様式から家具や設備、食事、ファッションに至るまで、かつてなら貴族や大地主階層の特権であった水準の物質的豊かさを得られるようになった。その過程で彼らは、地主階層への新参者の挑戦と影響を受けるようになった。地代以外の財源から資本を蓄積し、これ見よがしに派手なカネの使い方をする商人階層である。高い社会的地位が、物質的な状態、かつてなかったほどの壮麗な水準で特徴付けられるようになり、見せびらかして競争するようになった時代であって、商人階層に対抗しようとした地主階層は、地代を上げるか、借金する必要があった。地代の上昇は根本的な解決策であったが、土地の耕作に対する全く新しい方法の導入などを要し、1780年以前には経済状況のせいでは不可能である場合がしばしばあった²²⁾。借金は目先の解決策であったが、返済に失敗すると抵当権が実行され、地主の地位を渴望する商人のような新参者に所領が売り渡されることを意味した。このようにして「生活様式の変革」は、スコットランドで土地がより効率よく管理運

22) ただし1780年以降には、多くの「工場村」(factory village) がグラスゴー周辺地域に出現し、その多くが進取の氣勢に富む中産階層の事業家に負っていた (Smout, 1996, pp. 85, 96)。工場村では事業家が出資して綿紡績工場を経営した。地主から見れば、工場村は所領の借地農に農産物市場を提供し、周辺の人口に対して雇用機会を拡大した。もし成功すれば、工場村は地主に、事業家へ資本を提供する義務を何ら負わせることなく、より多くの地代をもたらした (Smout, 1996, p. 95)。

営されるようになると同時に、その多くで18世紀を通じて所有者が変わり続ける原因となった (Devine, 2005c, pp. 78–79; Smout, 1985, pp. 265–271)²³⁾。

しかしながらこれらの商人地主階層は、常に自身の所領の有能な改良者であったとは限らないようである。スマウトは、上昇する地代がより優れた農法を通じて効率を高める方向へ小作農を効果的に駆り立てることとなったであろうものの、これらの新参の地主たちが、エディンバラ周辺の法律家たちを除いて、そのような新しい農業技術をとりわけ効果的に探り出し伝播した様子はないと論じている (Smout, 1985, p. 264)。フィリップソンも、グラスゴウのタバコ貴族の多くが周辺地域の土地に投資したものの、誇示的消費に関連するような大邸宅や奇抜な庭園を建造しただけで、スマスが商人地主階層と結び付けようとした賢明な改良とは関係がなかったと述べている (Phillipson, 2010, p. 123)。ウィルトンは、地主になった商人は「改良家の中でも最良の人たち」であるとするスマスの所見に疑問を投げかけ、「この時代の経済成長に対する商人の貢献」については未決の問題であると述べている (Wilton, 1971, p. 146)²⁴⁾。その上でウィルトンは、商人地主による改良の失敗例として、プロト工業化の中心地であったヨークシャーのウェスト・ライディング地方のデニスン家の事例を取り上げている。

商人が田舎の地所に移り住むのは、食糧品価格が工業製品価格より急速に上昇するからという理由なのか、それとも食糧品価格がそれほど激しく変化しないからという理由なのかは、経済史上の問題として広く議論され

23) 18世紀スコットランドの「生活様式の変革」は、スマスが『国富論』第三編で封建体制崩壊の背後にあった決定的要因として描いたテイストの変革と類似している。スマスがヨーロッパ史上の最も革命的な出来事として描きだした物語は、啓蒙時代のスコットランドでスマスの眼前に繰り広げられていた出来事でもあった。

24) しかしながら農業以外の部門では、たばこ貿易からもたらされた恩恵が広く行き渡っていたようにも思われる。リーは、たばこ貿易からの収益が靴の製造業、製鉄、ガラス製造、繊維産業へ投資され、繁栄がさらなる経済成長を生み出す好循環をもたらしたと論じている (Lee, 2005, p. 136)。

てきた。利益の増大が目的なのか、それとも貿易や金融のリスク低減が目的なのか、という問題である。スミス自身はキケロの規範を応用する形で、利益増大とリスク低減を区別せずに論じたが、18世紀スコットランドの商人地主は、もし両者を目指していたとすれば、資産のリスク低減には成功し、利益増大には必ずしも成功しないケースが多かったのではないかと思われる²⁵⁾。

18世紀スコットランドの経済史に照らしてみれば、都市の住民が土地を購入してカントリー・ジェントルマンになることに対してヒュームが批判的であったことは、注目に値する。ただでさえ高い商業の利潤率が高止まりし、通貨の流通を停滞させ、産業への刺激を減じる効果をもたらすとヒュームは考えていたからである (*Essays, "Of Public Credit", p. 354*)。反対にスミスは、農業を最も生産的かつ有徳な職業と描き、老境に差し掛かる都市の商人階層にその魅力を説こうとした。この違いは、彼らによる18世紀スコットランドの経済に対する見解の違いと同時に、キケロ理解の差異を示唆しており、したがって彼らによるキケロの言語の用い方の差異を探る手掛かりになるであろう。ヒュームはキケロを懐疑的な道德論者として読んだのに対して、スミスはキケロに懐疑派の要素を認めつつも、基本的にはハチスンと同じくストア派として捉えたからと推測することは可能である²⁶⁾。

25) ヨーロッパ大陸では、商人地主をめぐる状況は地域ごとに相当なばらつきがあったように思われる。

26) 『道徳感情論』の最終第6版(1790年)において、スミスは富と徳の双方に至る道を歩むストア的な慎慮ある人 (*prudent man*) を、『国富論』の老境の商人地主像と重ね合わせながら描いた (*TMS, VI. i. 7-13, pp. 213-216*)。慎慮ある人の友情 (*friendship*) は、若く未熟な人たちの間の関係とは異なり、「平静で節度があり、誠実」であると、キケロの友情論の議論に沿って描写されている (*TMS, VI. i. 9, p. 214; VI. ii. 1. 18, pp. 224-225*)。農業が最も生産性が高く安全であり、平穏で有徳な産業であると『国富論』で熱心に説かれていたことから考えると、「彼がすでに享受している安全な静穏を危険にさらすだけで、おそらく増やすことはない新しい事業や冒険」を避ける慎慮ある人の職業は、老境の商人地主と同様に農業であるべきであろう (*TMS, VI. i. 12, p. 215*)。これらの点については *Muller, 1993, p. 178* も参照。『道徳感情論』での

商人地主の徳が経済発展をもたらす好例としてスミスは、最も急速に経済が発展していると彼が考えていた北米植民地を取り上げた (WN, IV. vii. b. 15, p. 571)²⁷⁾。スミスが「多くの肥沃な土地と、彼ら自身の仕事を彼ら自身のやり方で行う自由こそが、全ての新植民地の繁栄の二つの大きな原因であるように思われる」と述べた時 (WN, IV. vii. b. 16, p. 572)、スミスはキケロを通したストア哲学の言語を用いて北米植民地の繁栄を描いている。英国の北米植民地では自由な商業が基本的には認められており、自由な商人地主は彼ら自身の利益に基づいて事業を決定し遂行することが可能であるため、必然的に資本が農業に集まり、最も急速な経済発展が実現するとスミスは説いた (WN, II. v. 21, p. 366)。これは農業こそが最も生産性が高く有徳な産業であるとのキケロ的な規範を、キケロの言語を用いて再論するものであった。

英国の北米植民地のように、資本のフローが政治介入から基本的に自由であれば、商人は政治から独立して自らの資本を自らの利潤のために用いることが可能になる。その場合に自己利益を追求する個人の行動は、「見えざる手に導かれて」自然に、しかし意図せずして社会全体の生産物の価値の最大化に貢献することになるとスミスは述べた。

あらゆる社会の年間の収入は、常にその社会の産業の年間の生産物全体の交換価値に正確に等しい、というよりその交換価値とまさに同じもの

慎重ある人の描写は、グラスゴー市長を務めたこともあるアンドリュー・コクレン (Lord Provost Andrew Cochrane, 1693-1777) がモデルであったと、伝統的に見なされてきた (Gray, 1948, p. 13)。コクレンはグラスゴーの商人・知識階層の代表的存在であり、資産と学識に富むタバコ貴族であった。彼が1740年代に創設した「ポリティカル・エコノミー・クラブ」は50年代には隆盛を極めたが、そこで毎週開かれた会合はスミスに、聡明な商人たちが彼らの事業について語り合うのを聞く機会を提供した (Phillipson, 2010, pp. 40, 129)。スミスは『国富論』の材料を集めるに際して、コクレンの情報に対する恩義を認めていた (Bagehot, 1881, p. 258; Carlyle, 1990, p. 82)。

27) 北米植民地とカリブ海諸島の植民地では大部分の地主が商人地主であると、スミスは見なしていた (WN, I. vi. 20, p. 70)。

である。あらゆる個人が、それゆえ、国内産業を支えるために彼の資本を使用し、国内産業の生産物が最大の価値をもつように指揮監督する上でできる限り努力すれば、あらゆる個人が社会の年間の収入をできる限り大きくするように必然的に努めるということになる。彼は大抵、公共の利益を促進するよう意図していることはなく、彼がどの程度それを促進しているのかを知ることもない。外国産業よりも国内産業を支えることを好むことで、彼は彼自身の安心を意図しているだけであり、その生産物が最大の価値をもつように国内産業を指揮監督することで、彼は彼自身の収益を意図しているだけであるが、この場合に彼は、他の多くの場合と同様、見えざる手に導かれて、彼の意図に関わりのない目的を促進することになる。その目的が彼の意図することではなくとも、社会にとって常に悪いこととも限らない。彼自身の利益を追求することで、彼はしばしば社会の利益を、彼がそれを真に意図して促進する場合よりも効果的に促進している。公共善のために気取って売買する人たちによって、何らかの善が成されたなどということを私は知らない。それは実際に、商人の間でよく見られる気取りではなく、彼らにそれを思い留ませるのに、多くの言葉を費やす必要はない (WN, IV. ii. 9, pp. 455–456)。

ただしスミスの描いた「見えざる手」は、同量の資本であれば中継貿易よりも外国貿易に、外国貿易よりも国内産業に投じた方が、リスクが少なく、より多くの雇用を国内に生み出し、価値を生産し、したがってより多くの利潤を得ることができるといふ投資におけるキケロ流の美的感覚を前提にした議論であった (WN, IV. ii. 5–8, pp. 454–455)²⁸⁾。国内産業の中でも農業への投資が最も安全で高収益であると、スミスがキケロを規範として述べていたことは言うまでもない (WN, III. i. 1–9, pp. 376–380)。

ストア派とキケロから発展させた新しい経済学の言語を用いることで、

28) WN, IV. ii. 3–4, pp. 453–454; IV. v. a. 3, pp. 505–506 も参照。

スミスが自由市場を整備して「自然的自由がひとりりでに確立する」ようにすることを最善の政策と結論付け（*WN*, IV. ix. 51, p. 687²⁹⁾、商業こそが「個人の間と同じく、国の間でも、自然に和合と友好の絆となるべきものである」として（*WN*, IV. iii. c. 9, p. 493³⁰⁾、自由で独立した通商とストア派の社交性の概念を重ね合わせていたことは、不思議ではない。例えば1707年のユニオンがスコットランドにもたらした最大の利益は、イングランドとの自由貿易であり、その結果、ハイランドの家畜の価格が上がり、地代が増え、資本の増加と土地の改良が同時に実現したとスミスは考えていた（*WN*, I. xi. l. 3, pp. 239–240; I. xi. b. 8, p. 165も参照）。

個人の行動の意図せざる結果について、スミスが「見えざる手」などの表現で語った際、スミスはストア哲学についての独自の理解に基づいて、新しい経済学の言語を生み出している。田中秀夫が述べる通り、スミスの「見えざる手」や、スコットランド啓蒙の歴史思想の「意図せざる結果」の論理は、悪徳でさえ繁栄の元であり、「私悪は公益」と見なすマンドゥヴィルの分析を先駆としており、各人の欲望むき出しの自由な追求が許されている大きな商業社会では、各人の意図を超えた社会法則が働くのだという認識が深化していった結果であると見ることも可能である（田中, 2013b, p. 78）。マンドゥヴィルは奢侈や悪徳を排除するのではなく、それもまたダイナミックな商業文明の活力の源になっているという現実に目を向け、前代未聞の競争的で荒々しい側面にも社会の繁栄への貢献があるのだという「意図せざる結果」に目を向けた（田中, 2013b, p. 80）。スコットランドの自然法思想はマンドゥヴィル流の「意図せざる結果」を重視する傾向

29) *LJ* (A), vi. 92–97, pp. 365–366; *LJ* (B), 235, p. 499; *WN*, IV. v. b. 43, p. 540; IV. vii. c. 44, p. 606も参照。すでに『道徳感情論』でスミスは、自身が意図する自由放任の経済学の体系について構想し、描写していた（*TMS*, IV. 1. 11, p. 185–187）。*LJ* (A), v. 122, p. 319も参照。

30) *WN*, IV. iii. c. 11, p. 494も参照。『道徳感情論』の最終第6版（1790年）において、スミスはかつてヒュームも論じたイングランドとフランスの間の国民的偏見について、より明示的に言及することとなる（*TMS*, VI. ii. 2. 3, pp. 228–229）。*LJ* (A), vi. 158–160, pp. 389–390; *LJ* (B), 261–266, pp. 511–513も参照。

が強く、設計主義でも理性万能主義でもない。対照的にイングランドの自然法思想を母体とする社会契約論は、意図による結果の創出の思想であるが、この作為の論理を批判的、歴史的に検証する経験主義がスコットランド啓蒙思想の特徴である（田中, 2013b, p. 113）。

とは言え、同時にスミスの「見えざる手」のコンセプトは、社交性や社会の調和、独立した個人の行動の背後で働く神の摂理の導きなどのストア派の思想の再考と言語の革新を通して「意図せざる結果」についてのマンドゥヴィル流の詭弁を批判しつつ練り上げられた成果でもあった。『道徳感情論』と『国富論』の両著で頻繁に使われる「ひとりでの」（of its own accord）などのスミスの言い回しは（TMS, VII. ii. 1. 20, p. 276; WN, IV. ii. 3, p. 453 など多数）、ストア哲学の言語が、経済の各部門・各産業が独立しつつ相互に協調し合うことで最大の利益を生み出す「自然的自由」の状態をスミスが描写するために応用され洗練される過程の中で、経済学の言語として昇華された典型的な表現である。キケロを通じたストア哲学の言語を発展させていったことは、ストア哲学に強く影響されたハチスンの道徳哲学をヒュームが既に破壊してしまった後の時代にあって、それでもスミスをしてヒューム的な懐疑論に陥ることなくマンドゥヴィル批判を可能にした戦略であり、スミスが創り上げた経済学の言語はその産物であった（Furuya, 2010, p. 52）。

18世紀スコットランドのみならず、近世ヨーロッパ全般の経済史に照らしてみれば、スミスの商人地主像は現実の商人地主を描いたものというよりも、マンドゥヴィルや重商主義を批判するための戦略的な概念であったという側面が浮び上ってくるであろう。スミスは国富の増大に貢献する自由な商人地主という理想像を、特権の大製造業者・大商人と対照させながら、キケロの言語を経済学の記述に相応しい言語に巧みに発展させることで創り上げた。農業資本が最も安全で最も高収益であるとスミスは論じたが、それに対する経済理論的裏付けは不明なままであり、スミスがキケロ流に農業を称賛し、近世商業社会のあり様や投資についての美学を提示

した点に、スミスが洗練し自らフルに活用した経済学の言語の役割の一端が示されている。それはスミスが重商主義者や重農主義者の中に見た誤謬、つまり経済の特定の部門を、それが「ひとりで」成長する限度を超えて肩入れするという錯誤を犯すことなく、外国貿易などにおける党派心をヒュームに従って批判する上でも、この言語が極めて効果的であったという側面である。富と徳の両立というスミスのテーマも、現実の商人地主が実現する目標というよりは、マンドゥヴィル批判という論争上の主張として提示された意味合いの方が強かったと言える³¹⁾。

スミスはストア哲学の言語を彼独自の経済学の言語に発展させることで、もし農業が独立した商人地主によって、公共の利益よりも農業自体の喜びと自身の資本の安全を目指して従事されるなら、結果的にその利益と国富に対する貢献が最大化すると論じた。反対に、公共の利益が積極的に意図されるなら、それはむしろ最大化されないと、「見えざる手」の段落でも述べている。ストア哲学の言語は、スミスにおいて経済学の言語として洗練され、ストア派に対する風刺として表現されたマンドゥヴィルの統治論への批判として、自由市場政策論においても記述に活用されることになる。

彼ら自身にとって相応しいと思われる善や利益を欲すること、追求することから人々を抑制することは、残酷ではないだろうか。人々の誤りや、間違った行動に対してあなたが腹を立てたとしても、ある意味ではあなたの方に非があるように見える。なぜなら、全ての行為は彼ら自身にとって相応しいと思われる善を目指して行われるものだからである (*Meditations*, VI. 27, pp. 147–148)。

31) スミスはこのような商人地主像を、イングランドのヨーマン階層のスコットランドにおいて切望すべき代替として描いた可能性もある。ヨーマンは土地自由保有権 (freehold) を持つ農業家であり、スコットランドの農業家より安定した土地所有権を保証され、一握りの大地主階層に土地所有が集中していたスコットランドでは出現しなかった階層である。

これはマルクス・アウレリウスの言葉であるが、このような言明がスミス自身によってなされたとしても不自然ではないほど、スミスの経済学の言語はストア哲学の言語に、意味論の多くを負っていたのである。

4. 終わりに——スコットランド啓蒙におけるストア哲学の言語

スコットランド啓蒙思想の最も重要な貢献として、本稿ではスミスを中心に道徳哲学と経済学について取り上げたが、特に経済学に関しては1970年代以降の思想史研究の中で、ルネサンス以来の政治思想の伝統である古典的共和主義、またはシヴィック・ヒューマニズムにおける商業や公債の批判と、ヨーロッパ大陸の自然法学における財産権や交換の理論という二つの枠組みを通して、スコットランド啓蒙思想家たちがいかにして経済学の言語を形成したかが問題とされてきた。代表例がドナルド・ウィンチの『アダム・スミスの政治学』(*Adam Smith's Politics*, 1978)と、イシュトファン・ホントとマイケル・イグナティエフ共編著の論文集『富と徳——スコットランド啓蒙における経済学の形成——』(*Wealth and Virtue: The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, 1983)である(Winch, 1978; Hont and Ignatieff, 1983)。

全体としてみれば、スコットランド啓蒙思想は当時の大学の道徳哲学のカリキュラムに組み込まれていた自然法学の枠組みを基本としつつ、共和主義的な近代批判からも示唆を受けながら、新しい時代の道徳哲学や経済学、さらには歴史学に貢献を果たしたと見ることは可能であろう。例えばスミスを始め、ジョン・ミラーやファーガソンなどいわゆる「スコットランド歴史学派」は、法や慣習などの制度の発展の要因を、立法者など卓越した個人の天才や先見の明ではなく、社会的・経済的必要性に求めるという自然法学的な認識を基本として持っており、社会の改革、歴史の進歩は人為的な設計ではなく行動の意図せざる結果としてもたらされると捉えた(Brown, 1994, pp. 125–126; Stewart, 1983, p. 322; 渡辺, 2014)。この立法者神話の破壊こそ、「スコットランド啓蒙の社会科学の最も創意に富んだ大

胆な一撃」というのが、ダンカン・フォーブズの評価であった（Forbes, 1966, p. xxiv）。スミスの『国富論』も経済を、立法者や政治家の指導を前提とするものとしてではなく、自然的自由の体系として、国家の政策から独立して発展することが可能な独自の世界として捉えた。競争市場や価格形成、自己利益、個人と社会の経済的利益の調和といった議論なら、スミス以前のジェイムズ・ステュアートや重農学派などにも見られたが、このように自己調節的な独立したプロセスとして経済発展を論じたことが、『国富論』の独創的で革新的な点であった。

しかし同時にスミスは、共和主義が重視した公共精神の意義まで否定したわけではない。スミスは政治的・公共の人間から経済人・利己的個人へと、人間像を転換したが、公正や正義、徳と市民的自由を否定して良いとは考えていなかった。スミスは解放された利己的欲望に正義のルールを与え、正義と生命を守るためのささやかな徳、公共精神の必要性を認めていた。また利己的欲望の肥大にも批判的であり、公共の利益を掲げてその美名に隠れて私益を追求する重商主義者の欺瞞を断罪した。スミスは富裕な社会を実現するために、当時の政府の政策であった重商主義的な保護と規制の廃止を主張し、市民的自由の実現を求めた。その限りではスミスは、日本では田中秀夫が強調してきたように、個人主義者でありながら共和主義の伝統も受け継いでいたと見ることは可能である（田中, 2013b, pp. 172, 191, 194）。とは言え、政治のヘゲモニーはコート派ホイッグが握った一方で、啓蒙思想の本流はキャロライン・ロビンズが描き出した18世紀の「コモンウェルスマン」のようなカントリー派ホイッグ寄りの改革思想であったとまで見なすことは妥当であろうか？（Robbins, 1959; 田中, 2013b, p. 76）

この点について私自身は、スコットランド啓蒙においては自然法思想、自然権思想の伝統の方が相対的には強く、共和主義の伝統が深い関心を示してきた「市民」の概念、「市民的自由」や「市民革命」についての議論は取り立てて有力であるわけではなかったと考えている。スコットランド啓蒙の中心地はエディンバラとグラスゴーであり、アバディーンが両都市

に続いたが、コモンウェルスマンの思想を生んだのはアバディーンくらいである（Carter and Pittock, 1987）。スコットランド啓蒙思想の本流は、むしろエディンバラの歴史学者ウィリアム・ロバートソンやグラスゴーのスミスに代表される聖職者啓蒙や保守的啓蒙であり³²⁾、ユニオン体制の下で政治的にもアーガイル公爵などのコート派ホイッグ寄りであった（Sher, 1985; Hook and Sher, 1995）。重商主義批判で自由市場政策導入を主張している側面は共和主義的と見なすことは出来るが、全体としては自然法思想が基本であり、自然法思想を再編成することで商業の社会変革力、歴史推進力に注目する視点を提供した文明社会史観がスコットランド啓蒙思想の根本にあったと私は考えている。

本稿では十分な形で取り上げる余裕がなかったが、「文明社会史論としての歴史思想」こそが、スコットランド啓蒙思想において、特にその経済学において核心であったと私は考えている。経済学の母体となった道德哲学も、フランスとイングランドからの継承であり、それを「歴史化」(historicise) したのがスコットランド人の道德哲学者たちである。その際に参照軸となったのが自然法の歴史である。重商主義批判など、共和主義的な発想が存在したことも間違いないが、法学、政治学、経済学のいずれも、スコットランド人はその独自の文明社会史論としての歴史思想を通して再編成したのだと、今のところ私は理解している。これからの研究課題は、そういった思想形成のプロセスにおいて様々な思想的伝統がどのようにスコットランドに流れ込み、啓蒙の形成に寄与したかという複雑な思想史を解き明かしていくことである。

その一環として本稿で試みたのが、スコットランド啓蒙思想におけるストア哲学の言語の受容と進化の一端を探ることである。スミスの見えざる手の概念がストアの摂理概念と結び付けられて理解されてきたことはよく

32) 例えばスミスは『道德感情論』の中で、キャロライン・ロビンズが描き出した18世紀の「コモンウェルスマン」とも重なる聖職者啓蒙における非国教徒（ディセンター）の学院に対して明確に否定的である（TMS, V. 2. 3, p. 201）。

知られている。スミスにおける神学的な言語をストア的と見なす解釈は、マクフィーの研究と、グラスゴー版スミス全集の『道徳感情論』へのラファエルとマクフィーによる序論で知られるようになった。ラファエルとマクフィーは、ストア哲学がスミスの倫理学への最も重要な影響であり、経済学へも根本的な影響を与えたと述べた。例えばスミスにおいては「自己統制」(self-command)の概念があらゆる徳の理解の根底にあり、これはストア哲学がスミスの倫理学や社会科学全体にいかにも幅広く浸透していたかを示している (Macfie, 1967; Macfie, 1971; Raphael and Macfie, 1976, pp. 5-6)³³⁾。スミスは「自己保存」(self-preservation)こそ自然が私たちに委ねた第一の仕事だとストア派に従って述べたが (TMS, II. ii. 2. 1, p. 82; VI. ii. 1. 1, p. 219; VII. ii. 1. 15, p. 272; Raphael and Macfie, 1976, p. 8)、これが人々をして富と権力の追及へと駆り立て、経済の原動力を生み、自身の境遇を改善しようとする人間の根源的、自然で本来的な、しかし罪深いわけではない欲望を生み出し、あらゆる経済活動を生み出していくとスミスは見なしていた (TMS, I. iii. 2. 1, p. 50; WN, II. iii. 28, p. 341; III. iii. 12, p. 405; IV. v. b. 43, p. 540; IV. ix. 28, p. 674; Raphael and Macfie, 1976, p. 9; Long, 2011, p. 101)。見えざる手の議論に対するマンドゥヴィルやルソーの影響は弱く、『道徳感情論』全体を通してその言語や学説に現れるストア哲学やヒュームの影響には較べるべくもないとラファエルとマクフィーは論じている (Raphael and Macfie, 1976, p. 11)。

もともと17世紀から18世紀初頭の自然法学が理論化した私有財産権の概念は、理性と自然を等しく法の道徳的基礎と見なしたストア的な自然法理解から発展したものであった。人間理性を神の摂理の表れと認めることから、同国人だけでなく外国人も含めた普遍的友愛というストア哲学の概念が、その根底にはあった。普遍的友愛こそが自然法 (ius gentium) の

33) この解釈を継承してスミス研究を進めてきた論者も多く存在する (Waszek, 1984; Heise, 1991; Brown, 1994; Hill, 2001; Vivenza, 2001; Vivenza, 2004, p. 108; Forman-Barzilai, 2010, pp. 6-7; Oslington, 2011, pp. 5-6)。

基礎であり、正義だけでなく、親切、寛大、善良を支える万国共通の利益であった。ここで言う正義とは、他人に危害を加えることを避けるという消極的な側面だけでなく、自己利益や物質的必要のみに囚われることなく人間の自然な社交性に基づいて他人に親切で寛大な行為をするという積極的な側面をも包摂していた (Brown, 1994, pp. 104-105)。近世ヨーロッパの自然法学は、私有財産権など個人としての権利の主張を前面に押し出したが、これはストア的な正義のうち他人に危害を加えることを禁ずるという消極的な側面を継承したものであったと言える。反対に正義の積極的な側面である普遍的友愛に基づいて為されるべき他人への道徳的義務としての正義の概念は、個人も全体の統合された構成要素と見るストア哲学の社会観と共に、シヴィック・ヒューマニズムに継承されたと解釈することは可能である。社会契約論などの共和主義的な思想は、自然法学で個々ばらばらな権利主体と捉えられた個人を、社会的・政治的領域に捉え直す試みであったと見なすこともできるのであろう (Brown, 1994, p. 111)。この意味でストア哲学の言語は、自然法学とシヴィック・ヒューマニズムという相反する思想的伝統の双方の言語の源流であったことから、両者の思想的伝統がどのように18世紀スコットランドにおいて再融合し、啓蒙思想の形成に寄与したかという複雑な思想史を解き明かしていく上で結節点を占めていると私は考えている。

参考文献

一次文献

Carlyle, Alexander (1990/1860) *The Autobiography of Dr. Alexander Carlyle of Inveresk, 1722–1805*, John Hill Burton, ed. (Bristol: Thoemmes Antiquarian Books).

Cato, Marcus Porcius, “the Elder” (1998/c. 160 BCE) *On Farming (De Agri Cultura)*, translated by Andrew Dalby (Totnes, Devon: Prospect Books).

Cicero, Marcus Tullius (1856/44 BCE) *An Essay on Old Age (Cato maior de senectute; abbreviated as Cato maior)*, in *Cicero’s Three Books of Offices, or Moral Duties; also his Cato Major, An Essay on Old Age; Laelius, An Essay on Friendship; Paradoxes; Scipio’s Dream; and Letter to Quintus on the Duties of a Magistrate*, translated by Cyrus R. Edmonds (London: Henry G. Bohn).

Cicero, Marcus Tullius (1991/45 BCE) *On Duties (De Officiis)*, M. T. Griffin and E. M. Atkins, eds. (Cambridge: Cambridge University Press).

Cicero, Marcus Tullius (2001/45 BCE) *On Moral Ends (De Finibus Bonorum et Malorum)*, translated by Raphael Woolf (Cambridge: Cambridge University Press).

Donaldson, William (1775) *Agriculture Considered as a Moral and Political Duty* (London: T. Becket).

Hume, David (2007/1739–1740) *A Treatise of Human Nature* (abbreviated as *THN*), David Fate Norton and Mary J. Norton, eds., volume 1 (Oxford: Oxford University Press); D・ヒューム『人性論』大槻春彦・訳（岩波文庫、1948年）；『人間本性論』木曾好能・訳（法政大学出版局、1995年）；『ヒューム 人性論』土岐邦夫・小西嘉四郎・訳（中公クラシックス、2010年）。

- Hume, David (1985/1758) *Essays, Moral, Political, and Literary* (abbreviated as *Essays*), Eugene F. Miller, ed. (Indianapolis: Liberty Fund); D・ヒューム『政治論集』田中秀夫・訳（京都大学学術出版会、2010年）；『ヒューム 道徳・政治・文学論集』田中敏弘・訳（名古屋大学出版会、2011年）。
- Hutcheson, Francis (2004/1725) *An Inquiry into the Original of Our Ideas of Beauty and Virtue* (abbreviated as *BV*), Wolfgang Leidhold, ed. (Indianapolis: Liberty Fund).
- Hutcheson, Francis (2002/1728) *An Essay on the Nature and Conduct of the Passions and Affections, with Illustrations on the Moral Sense* (abbreviated as *PA*), Aaron Garrett, ed. (Indianapolis: Liberty Fund).
- Hutcheson, Francis (1755) *A System of Moral Philosophy* (abbreviated as *System*), in 2 volumes (Glasgow: A. Millar and T. Longman).
- Mandeville, Bernard (1924/1714) *The Fable of the Bees* (abbreviated as *FB*), Frederick Benjamin Kaye, ed., in 2 volumes (Oxford: Clarendon Press of Oxford University Press); マンデビル『蜂の寓話〈正・続巻〉』泉谷治・訳（法政大学出版局、1985–1993年）。
- Marcus Aurelius Antoninus Augustus (1742/late second century CE) *Meditations of the Emperor Marcus Aurelius Antonius* (abbreviated as *Meditations*), translated by Francis Hutcheson and James Moor (Glasgow: Robert Foulis).
- Smith, Adam (1976/1759) *The Theory of Moral Sentiments* (abbreviated as *TMS*), David Daiches Raphael and Alec Lawrence Macfie, eds., as volume 1 of *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith* (Oxford: Clarendon Press of Oxford University Press); アダム・スミス『道徳情操論〈上・下巻〉』米林富男・訳（未来社、1969–1970年）；『道徳感情論〈上・下巻〉』水田洋・訳（岩波文庫、2003年）。

- Smith, Adam (1976/1776) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* (abbreviated as *WN*), Roy Hutcheson Campbell and Andrew. S. Skinner, eds., as volume 2 of *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith* (Oxford: Clarendon Press of Oxford University Press); アダム・スミス『国富論』(全三卷)大河内一男・監訳(中公文庫、1978年);『国富論』(全四卷)杉山忠平・訳、水田洋・監訳(岩波文庫、2000–2001年);『国富論草稿』水田洋・訳(日本評論社、世界古典文庫、1948年).
- Smith, Adam (1978/1762–1763, 1766) *Lectures on Jurisprudence* (abbreviated as *LJ*), Ronald Lindley Meek, David Daiches Raphael, and Peter Gonville Stein, eds., as volume 5 of *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith* (Oxford: Clarendon Press of Oxford University Press); アダム・スミス『グラスゴウ大学講義』高島善哉・水田洋・訳(日本評論社、1947年; 再刊、1989年);『法学講義』水田洋・訳(岩波文庫、2005年).
- Stewart, Dugald (1983/1795) *Account of the Life and Writings of Adam Smith, LL.D.*, in Adam Smith, *Essays on Philosophical Subjects*, William Persehouse Delisle Wightman and J. C. Bryce, eds., as volume 3 of *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith* (Oxford: Clarendon Press of Oxford University Press), pp. 269–351; D・ステュアート『アダム・スミスの生涯と著作』福鎌忠怒・訳(御茶の水書房、1984年).
- Xenophon (1994/c. 362 BCE) *Œconomicus: A Social and Historical Commentary*, translated by Sarah B. Pomeroy (Oxford: Clarendon Press of Oxford University Press).

二次文献

- Allan, David (2002) *Scotland in the Eighteenth Century: Union and*

Enlightenment (London: Longman).

- Bagehot, Walter (1881) “Adam Smith as a Person” (from *The Fortnightly Review*, 1876), in *Biographical Studies by the late Walter Bagehot*, Richard Holt Hutton, ed. (London: Longmans, Green, and Co.), pp. 247–281.
- Blaug, Mark, ed. (1991) *St. Thomas Aquinas, 1225–74* (London: Edward Elgar Publishing).
- Broadie, Alexander (2009) *A History of Scottish Philosophy* (Edinburgh: Edinburgh University Press).
- Brown, Vivienne (1994) *Adam Smith’s Discourse: Canonicity, Commerce and Conscience* (London and New York: Routledge).
- Bryson, Gladys (1945) *Man and Society: The Scottish Inquiry of the Eighteenth Century* (Princeton: Princeton University Press).
- Campbell, Roy Hutchison, and Andrew S. Skinner, eds. (1982) *The Origins and Nature of the Scottish Enlightenment* (Edinburgh: John Donald).
- Carter, Jennifer J., and Joan H. Pittock, eds. (1987) *Aberdeen and the Enlightenment* (Aberdeen: Aberdeen University Press).
- Cassirer, Ernst (1932) *Die Philosophie der Aufklärung* (Tübingen: Mohr); Ernst Cassirer, *The Philosophy of the Enlightenment*, translated by Fritz C. A. Koelln and James P. Pette (Princeton: Princeton University Press, 1951); エルンスト・カッシーラー 『啓蒙主義の哲学』 中野好之・訳 (紀伊国屋書店、1997年)、上下巻 (ちくま学芸文庫、2003年)。
- Colley, Linda (1992) *Britons: Forging the Nation* (New Haven: Yale University Press); リンダ・コリー 『イギリス国民の誕生』 川北稔・訳 (名古屋大学出版会、2000年)。
- Daiches, David, Peter Jones, and Jean Jones, eds. (1986) *The Hotbed of Genius: The Scottish Enlightenment, 1730–1790* (Edinburgh: Edinburgh University Press).
- Devine, Thomas Martin (1971) “Glasgow Colonial Merchants and Land,

1770–1815”, in *Land and Industry: The Landed Estate and the Industrial Revolution*, John Trevor Ward and Richard George Wilton, eds. (Newton Abbot: David and Charles), pp. 205–244.

Devine, Thomas Martin (1978) “An Eighteenth Century Business Elite”, *Scottish Historical Review*, 57, pp. 40–63.

Devine, Thomas Martin (2003) *Scotland’s Empire, 1700–1815* (London: Allen Lane of Penguin Books).

Devine, Thomas Martin (2005a) “The Modern Economy: Scotland and the Act of Union”, in *The Transformation of Scotland: The Economy since 1700*, Thomas Martin Devine, Clive H. Lee, and George C. Peden, eds. (Edinburgh: Edinburgh University Press), pp. 13–33.

Devine, Thomas Martin (2005b), “Industrialisation”, in *The Transformation of Scotland: The Economy since 1700*, Thomas Martin Devine, Clive H. Lee, and George C. Peden, eds. (Edinburgh: Edinburgh University Press), pp. 34–70.

Devine, Thomas Martin (2005c), “The Transformation of Agriculture: Cultivation and Clearance”, in *The Transformation of Scotland: The Economy since 1700*, Thomas Martin Devine, Clive H. Lee, and George C. Peden, eds. (Edinburgh: Edinburgh University Press), pp. 71–99.

Dwyer, John, Roger A. Mason, and Alexander Murdoch, eds. (1982) *New Perspectives on the Politics and Culture of Early Modern Scotland* (Edinburgh: John Donald).

Erskine, Caroline, and Roger A. Mason, eds. (2012) *George Buchanan: Political Thought in Early Modern Britain and Europe* (London: Ashgate).

Forbes, Duncan (1966) “Introduction” to Adam Ferguson, *An Essay on the History of Civil Society*, Duncan Forbes, ed. (Edinburgh: Edinburgh University Press).

Forbes, Duncan (1975) *Hume’s Philosophical Politics* (Cambridge: Cambridge

University Press); ダンカン・フォーブズ 『ヒュームの哲学的政治学』
田中秀夫・監訳 (昭和堂、2011年).

Forman-Barzilai, Fonna (2010) *Adam Smith and the Circles of Sympathy: Cosmopolitanism and Moral Theory* (Cambridge: Cambridge University Press).

Furuya, Hiroyuki (2010) "A Language of Taste in the Moral Philosophy of Adam Smith", *The Kyoto Economic Review*, 79 (1), pp. 40–65.

古家弘幸 (2015) 「書評 ニコラス・フィリップソン 『アダム・スミスとその時代』 永井大輔・訳 (白水社、2014年)」 『図書新聞』 (2015年1月10日号), p. 3.

Fowler, Thomas (1882) *Shaftesbury and Hutcheson* (London: Sampson Low, Marston, Searle, and Rivington).

Gay, Peter (1966) *The Enlightenment: An Interpretation, volume 1: The Rise of Modern Paganism* (New York: Vintage Books); ピーター・ゲイ 『自由の科学——ヨーロッパ啓蒙思想の社会史——〈第一巻〉』 中川久定・訳 (ミネルヴァ書房、1982年).

Gay, Peter (1969) *The Enlightenment: An Interpretation, volume 2: The Science of Freedom* (New York: Alfred K. Knopf); ピーター・ゲイ 『自由の科学——ヨーロッパ啓蒙思想の社会史——〈第二巻〉』 中川久定・他訳 (ミネルヴァ書房、1986年).

Goldgar, Anne (1995) *Impolite Learning: Conduct and Community in the Republic of Letters 1680–1750* (New Haven and London: Yale University Press).

Gray, Sir Alexander (1948) *Adam Smith* (London: The Historical Association).

Harris, Charles Reginald Schiller (1927) *Duns Scotus* (Oxford: Clarendon Press of Oxford University Press).

Heise, Paul A. (1991) "Stoicism in Adam Smith's Model of Human

Behavior: The Philosophical Foundations of Self-Betterment and the Invisible Hand”, *Oekonomie und Gesellschaft*, 9, pp. 64–78.

Hill, Lisa (2001) “The Hidden Theology of Adam Smith”, *The European Journal of the History of Economic Thought*, 8 (1), pp. 1–29.

Hont, Istvan, and Michael Ignatieff, eds. (1983) *Wealth and Virtue: The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment* (Cambridge: Cambridge University Press); ホント、イグナティエフ・共編著『富と徳——スコットランド啓蒙における経済学の形成——』水田洋・杉山忠平・監訳（未来社、1991年）。

Hook, Andrew, and Richard B. Sher, eds. (1995) *The Glasgow Enlightenment* (East Linton: Tuckwell Press).

Hope, Vincent M. (1989) *Virtue by Consensus: The Moral Philosophy of Hutcheson, Hume, and Adam Smith* (Oxford; Clarendon Press of Oxford University Press); ヴィンセント・ホープ『ハチスン、ヒューム、スマスの道徳哲学——合意による徳——』奥谷浩一・内田司・訳（創風社、1999年）。

Jardine, Lisa (1993) *Erasmus: Man of Letters* (Princeton: Princeton University Press).

Jones, Peter, ed. (1988) *Philosophy and Science in the Scottish Enlightenment* (Edinburgh: John Donald).

Kaye, Frederick Benjamin (1924) “Introduction” to Bernard Mandeville, *The Fable of the Bees*, Frederick Benjamin Kaye, ed., volume 1 (Oxford: Clarendon Press of Oxford University Press), pp. xvii–cxlvi.

Kemp Smith, Norman (1941) *The Philosophy of David Hume: A Critical Study of its Origins and Central Doctrines* (London: Macmillan).

Lee, Clive H. (2005) “Economic Progress: Wealth and Poverty”, in *The Transformation of Scotland: The Economy since 1700*, Thomas Martin Devine, Clive H. Lee, and George C. Peden, eds. (Edinburgh:

- Edinburgh University Press), pp. 128–156.
- Long, Brendan (2011) “Adam Smith’s Theodicy”, in *Adam Smith as Theologian*, Paul Oslington, ed. (New York: Routledge), pp. 98–105.
- Macfie, Alec Lawrence (1967) *The Individual in Society: Papers on Adam Smith* (London: George Allen and Unwin); A・L・マクフィー 『社会における個人』 水田洋・舟橋喜恵・天羽康夫・訳 (ミネルヴァ書房、1972年).
- Macfie, Alec Lawrence (1971) “The Invisible Hand of Jupiter”, *Journal of the History of Ideas*, 32 (4), pp. 595–599.
- Macinnes, A. I. (1994) “Landownership, Land Use and Elite Enterprise in Scottish Gaeldom”, in *Scottish Elites*, Thomas Martin Devine, ed. (Edinburgh: John Donald).
- Meikle, Scott (1997) *Aristotle’s Economic Thought* (Oxford: Oxford University Press).
- Moore, James (1994) “Hume and Hutcheson”, in *Hume and Hume’s Connexions*, Michael Alexander Stewart and John Prentice Wright, eds. (Edinburgh: Edinburgh University Press), pp. 25–37.
- Moore, James, and Michael Alexander Stewart (1993a) “A Scots-Irish Bookseller in Holland: William Smith of Amsterdam (1698–1741)”, *Eighteenth-Century Scotland: The Newsletter of the Eighteenth-Century Scottish Studies Society*, 7, pp. 8–11.
- Moore, James, and Michael Alexander Stewart (1993b) “William Smith and the Dissenters’ Book Trade”, *Bulletin of the Presbyterian Historical Society of Ireland*, 23, pp. 20–27.
- Muller, Jerry Z. (1993) *Adam Smith in His Time and Ours: Designing the Decent Society* (New York: The Free Press of Macmillan).
- Murdoch, Alexander (1998) *British History, 1660–1832: National Identity and Local Culture* (London: Macmillan).

- Norton, David Fate (1982) *David Hume: Common Sense Moralism, Sceptical Metaphysician* (Princeton: Princeton University Press).
- Oslington, Paul (2011) "Introduction: Theological Readings of Smith", in *Adam Smith as Theologian*, Paul Oslington, ed. (New York: Routledge), pp. 1–16.
- Otteson, James (2002) *Adam Smith's Marketplace of Life* (Cambridge: Cambridge University Press).
- Pack, Spencer J., and Eric Schliesser (2006) "Smith's Humean Criticism of Hume's Account of the Origin of Justice", *Journal of the History of Philosophy*, 44 (1), pp. 47–63.
- Phillipson, Nicholas T. (1973) "Towards a Definition of the Scottish Enlightenment", in *City and Society in the Eighteenth Century*, P. Fritz and D. Williams, eds. (Toronto: Hakkert), pp.125–147.
- Phillipson, Nicholas T. (1974) "Culture and Society in the Eighteenth-Century Province: The Case of Edinburgh and the Scottish Enlightenment", in *The University in Society*, Lawrence Stone, ed., volume 2 (Princeton: Princeton University Press), pp. 407–448.
- Phillipson, Nicholas T. (1981) "The Scottish Enlightenment", in *The Enlightenment in National Context*, Roy Porter and Mikulas Teich, eds. (Cambridge: Cambridge University Press), pp. 19–40.
- Phillipson, Nicholas T. (1981) "The Scottish Enlightenment", in *A Companion to Scottish Culture*, David Daiches, ed. (London: E. Arnold), pp. 340–345.
- Phillipson, Nicholas T. (1983) "Adam Smith as Civic Moralism", in *Wealth and Virtue: The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, Istvan Hont and Michael Ignatieff, eds. (Cambridge: Cambridge University Press), pp. 179–202.
- Phillipson, Nicholas T. (1987) "Politics, Politeness and the Anglicisation of

- Early Eighteenth-Century Scottish Culture”, in *Scotland and England 1286–1815*, Roger Mason, ed. (Edinburgh: John Donald), pp. 226–246.
- Phillipson, Nicholas T. (1989) *Hume* (London: Weidenfeld and Nicholson).
- Phillipson, Nicholas T. (1993) “Politics and Politeness in the Reigns of Anne and the Early Hanoverians”, in *The Varieties of British Political Thought, 1500–1800*, John G. A. Pocock, ed. (Cambridge: Cambridge University Press), pp. 211–245.
- Phillipson, Nicholas T. (2000) “Language, Sociability, and History: Some Reflections on the Foundations of Adam Smith’s Science of Man”, in *Economy, Polity, and Society: British Intellectual History 1750–1950*, Stefan Collini, Richard Whatmore, and Brian Young, eds. (Cambridge: Cambridge University Press), pp. 70–84.
- Phillipson, Nicholas T. (2010) *Adam Smith: An Enlightened Life* (London: Allen Lane of Penguin Books; New Haven: Yale University Press); ニコラス・フィリップソン『アダム・スミスとその時代』永井大輔・訳 (白水社、2014年).
- Pocock, John G. A. (1983) “Cambridge Paradigms and Scotch Philosophers: A Study of the Relations between the Civic Humanist and the Civil Jurisprudential Interpretation of Eighteenth-Century Social Thought”, in *Wealth and Virtue: The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, Istvan Hont and Michael Ignatieff, eds. (Cambridge: Cambridge University Press), pp. 235–252.
- Pocock, John G. A. (1985) “Clergy and Commerce: The Conservative Enlightenment in England”, in *L’eta dei lumi: Studi storici sul settecento europeo in onore di Franco Venturi*, Raffaele Ajello et al., eds., volume 1 (Naples: Jovene Editore), pp. 523–562.
- Pocock, John G. A. (1993a) “Political Thought in the English-Speaking Atlantic, 1760–1790: (i) The Imperial Crisis”, in *The Varieties of British*

Political Thought, 1500–1800, John G. A. Pocock, ed. (Cambridge: Cambridge University Press), pp. 246–282.

Pocock, John G. A. (1993b) “Political Thought in the English-Speaking Atlantic, 1760–1790: (ii) Empire, Revolution and an End of Early Modernity”, in *The Varieties of British Political Thought, 1500–1800*, John G. A. Pocock, ed. (Cambridge: Cambridge University Press), pp. 283–320.

Pocock, John G. A. (1999) *Barbarism and Religion*, volume 1: *The Enlightenments of Edward Gibbon, 1737–1794* (Cambridge: Cambridge University Press).

Porter, Roy, and Mikulas Teich, eds. (1981) *The Enlightenment in National Context* (Cambridge: Cambridge University Press).

Raphael, David Daiches, and Alec Lawrence Macfie (1976) “Introduction” to Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, David Daiches Raphael and Alec Lawrence Macfie, eds., as volume 1 of *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith* (Oxford: Clarendon Press of Oxford University Press), pp. 1–52.

Raphael, David Daiches, and Tatsuya Sakamoto (1990) “Notes and Discussions: Anonymous Writings of David Hume”, *Journal of the History of Philosophy*, 28, pp. 271–281.

Raynor, David R. (1984) “Hume’s Abstract of Adam Smith’s *Theory of Moral Sentiments*”, *Journal of the History of Philosophy*, 22, pp. 51–80.

Robbins, Caroline (1959) *The Eighteenth-Century Commonwealthman: Studies in the Transmission, Development and Circumstance of English Liberal Thought* (Cambridge, MA: Harvard University Press).

Robertson, John (2000) “The Scottish Contribution to the Enlightenment”, in *The Scottish Enlightenment: Essays in Reinterpretation*, Paul Wood, ed. (Rochester: Rochester University Press), pp. 37–62.

- Robertson, John (2005) *The Case for the Enlightenment: Scotland and Naples 1680–1760* (Cambridge: Cambridge University Press).
- Ross, Ian Simpson (1995) “Adam Smith’s ‘Happiest’ Years as a Glasgow Professor”, in *The Glasgow Enlightenment*, Andrew Hook and Richard B. Sher, eds. (East Linton: Tuckwell Press).
- Rothschild, Emma (2001) *Economic Sentiments: Adam Smith, Condorcet, and the Enlightenment* (Cambridge, MA: Harvard University Press).
- Scott, William Robert (1900) *Francis Hutcheson: His Life, Teaching and Position in the History of Philosophy* (Cambridge: Cambridge University Press).
- Sher, Richard B. (1985) *Church and University in the Scottish Enlightenment: The Moderate Literati of Edinburgh* (Edinburgh: Edinburgh University Press).
- Skinner, Quentin Robert Duthie (1978) *The Foundations of Modern Political Thought*, in 2 volumes (Cambridge: Cambridge University Press); クエンティン・スキナー『近代政治思想の基礎——ルネッサンス、宗教改革の時代——』門間都喜郎・訳（春風社、2009年）。
- Smout, Thomas Christopher (1985/1969) *A History of the Scottish People 1560–1830* (London: Fontana Press of HarperCollins); T・C・スマウト『スコットランド国民の歴史』木村正俊・訳（原書房、2010年）。
- Smout, Thomas Christopher, ed. (1986) *Scotland and Europe, 1200–1850* (Edinburgh: John Donald).
- Smout, Thomas Christopher (1996/1970) “The Landowner and the Planned Village in Scotland, 1730–1830”, in *Scotland in the Age of Improvement*, Nicholas T. Phillipson and Rosalind Mitchison, eds. (Edinburgh: Edinburgh University Press), pp. 73–106.
- Stewart, Michael Alexander (1991) “The Stoic Legacy in the Early Scottish Enlightenment”, in *Atoms, Pneuma, and Tranquillity: Epicurean and Stoic*

- Themes in European Thought*, Margaret J. Osler, ed. (Cambridge: Cambridge University Press), pp. 273–296.
- Stewart, Michael Alexander (1995) *The Kirk and the Infidel: An Inaugural Lecture delivered at Lancaster University on 9 November 1994* (Lancaster: Lancaster University Publications).
- 田中秀夫 (2013a) 『近代社会とは何か——ケンブリッジ学派とスコットランド啓蒙——』 (京都大学学術出版会).
- 田中秀夫 (2013b) 『啓蒙の射程と思想家の旅』 (未来社).
- 田中正司 (2003/1988) 『アダム・スミスの自然法学——スコットランド啓蒙と経済学の生誕——〈第二版〉』 (御茶の水書房).
- Taylor, W. L. (1965) *Francis Hutcheson and David Hume as Predecessors of Adam Smith* (Durham, NC: Duke University Press).
- 上野大樹 (2014) 「モンテスキューと野蛮化する共和国像——共和主義的「文明」理解の盛衰をめぐって——」、田中秀夫・編著『野蛮と啓蒙——経済思想史からの接近——』 (京都大学学術出版会), pp. 389–427.
- Venturi, Franco (1971) *Utopia and Reform in the Enlightenment* (Cambridge: Cambridge University Press); フランコ・ヴェントゥーリ『啓蒙のユートピアと改革——1969年トレヴェリアン講義——』水田洋・加藤喜代志・訳 (みすず書房、1981年).
- Vivenza, Gloria (2001) *Adam Smith and the Classics: The Classical Heritage in Adam Smith's Thought* (Oxford: Oxford University Press).
- Vivenza, Gloria (2004) “Reading Adam Smith in the Light of the Classics”, *Adam Smith Review*, 1, pp. 107–124.
- Waszek, Norbert (1984) “Two Concepts of Morality: A Distinction of Adam Smith's Ethics and Its Stoic Origin”, *Journal of the History of Ideas*, 45 (4), pp. 591–606.
- 渡辺恵一 (2014) 「アダム・スミスの文明社会論——啓蒙と野蛮の諸相——」、田中秀夫・編著『野蛮と啓蒙——経済思想史からの接近——』

(京都大学学術出版会), pp. 255–297.

Wilton, Richard George (1971) “The Denisons and Milneses: Eighteenth-Century Merchant Landowners”, in *Land and Industry: The Landed Estate and the Industrial Revolution*, John Trevor Ward and Richard George Wilton, eds. (Newton Abbot: David and Charles).

Winch, Donald (1978) *Adam Smith's Politics: A Study in Historiographic Revision* (Cambridge: Cambridge University Press); ドナルド・ウインチ『アダム・スミスの政治学——歴史方法論的改訂の試み——』永井義雄・近藤加代子・訳 (ミネルヴァ書房、1989年).

米田昇平 (2014) 「J・F・ムロンの商業社会論——啓蒙の経済学——」、田中秀夫・編著『野蛮と啓蒙——経済思想史からの接近——』(京都大学学術出版会), pp. 331–358.

要旨

本稿はスコットランド啓蒙が果たした大きな思想的貢献として、道徳哲学と経済学を取り上げる。そしてスコットランド啓蒙思想全体に共通する特徴の一つとして、人間の持つ自然な社交性についてのストア的分析について紹介する。

スコットランド啓蒙の道徳哲学において、ハチスンにはキケロの中で規範主義的なストア哲学に好意的な部分を重視しつつキケロをストア派として読んだが、ヒュームはキケロを懐疑派として理解し、特に確率や錯覚、美や徳の判断基準としての功利性の重視など、懐疑派の現実主義的な側面を評価し、そこに自身が構想する実験的方法に基づく道徳論との親近性を見ていた。スミスは、マンドゥヴィルの逆説をストア哲学の厳格主義的な道徳論を放棄することで解決しようとしたヒュームの方法には賛成できなかったが、ヒュームがエピクロス派や懐疑派の道徳論から受け継いだ現実主義的な側面は評価し、むしろハチスンが好意的に受け入れたストア哲学の規範主義的な側面に批判の目を向けた。スミスは慈善や憐憫を説き富や地位の魅惑に警告を発する道徳家たちを尻目に、身分の上下や社会秩序と平和が、目に見えにくく不確実な知恵や徳ではなく、明白に違いが分かる出自や富に基づいているという現実を、道徳家たちの教えの正しさとは別に事実として認め、むしろ肯定的に捉えている。スミスの道徳哲学はストア哲学やハチスンを始め、伝統的な道徳哲学の権利問題重視から、ヒュームに影響を受けて現実問題重視にスタンスを変えた点に長所があり、それゆえに経済学の源泉となり得たのだと見なすことができる。

スコットランド啓蒙の経済学において、スミスの「見えざる手」のコンセプトは、社交性や社会の調和、独立した個人の行動の背後で働く神の摂理の導きなどのストア派の思想の再考と言語の革新を通して練り上げられた成果であった。『道徳感情論』と『国富論』の両著で頻繁に使われる「ひとりでに」(of its own accord)などのスミスの言い回しは、ストア哲

学の言語が、経済の各部門・各産業が独立しつつ相互に協調し合うことで最大の利益を生み出す「自然的自由」の状態をスミスが描写するために応用され洗練される過程の中で、経済学の言語として昇華された典型的な表現である。キケロを通じたストア哲学の言語を発展させていったことは、ストア哲学に強く影響されたハチスンの道徳哲学をヒュームが既に破壊してしまった後の時代にあって、それでもスミスをしてヒューム的な懐疑論に陥ることなくマンドゥヴィル批判を可能にした戦略であり、スミスが創り上げた経済学の言語はその産物であった。

ストア哲学の言語は、自然法学とシヴィック・ヒューマニズムという相反する思想的伝統の双方の言語の源流であり、両者の思想的伝統がどのように18世紀スコットランドにおいて再融合し、啓蒙思想の形成に寄与したかという複雑な思想史を解き明かしていく上で結節点を占めている。

